



佛の平等の説は一味の雨の如し、衆生の性に隨て受る所の同じからざること、彼の艸木の稟るところ各異なるが如し、佛の論へを以て、方便して開示し、種々の言辭を以て、一法を演說せり、佛の智慧に於ては、海の一滴の如し。我れ法雨を雨らして世間に充滿す、一味の法を力に隨て修行すること、彼の叢林、藥艸、諸樹の其の大小に隨て、漸く増し茂りて甚だ好きが如し。(法華經藥師品)

統

戰時講話

菅長大僧正本多日生現下が戰時講話の爲め、本年六月中旬二府六縣下遊教の際或地に於て講話せられたる概要を録し、之れを有縁の士女に示す

今回本職が親しく各地方を巡教する所以は、第一戰時講話に就て夙に内務省より勸奨ありしも、宗内の用務の爲め遷延し漸く本月より二府六縣下に巡教を始めた次第にして、戰時に於ける國民の覺悟及び戰死病死者の遺族に對し真正なる慰安を與へ、兼て戰死病死者の追悼會を各地到る所に執行し、又師團所在地に在りては師團並に豫備病院等を歴訪慰問せんとするにあり

戰時講話の事項は當局に於て調査せるものあり、即ち(一)開戦の由來、(二)戰爭の目的、(三)日露の國勢、(四)時局に對する國民の覺悟及び義務、(五)時局に對する經營、(六)善行美舉武勇談等なり、一項の下各細目あり、これを詳細に講話するに於ては、その一項一目も一場の講話題として尙ほ餘りあるべければ、今更の内より主要と認むべき二三の事項に就き講話せんとす

第一は開戦の由來、これには(一)東洋の形勢、(二)露國の慾

望、(三)日露の爭議、この三點に就て説明を要す、先づ如何にして戦を開くに至りたるかを知らざるべからず、敵國の捕虜は多く無知にして開戦の所由を知らざるものあり、我國には左程まで無教育のものは少かるべしと雖も、尙然然開戦の理由を意識し居らざるものなきにしもあらず、第一に東洋の形勢を知り、次に露國の慾望を知るべし、彼れは二百年來東洋に垂涎して手を延ばしつゝ、あるが故に、今回の戦には敗るゝとも容易にこの東方政策に於て手を引かざるべく、今後戦局収まりても尙ほ彼れは侵略主義を捨つるものとは思はれざるなり、されば吾人日本の國民たるものは子々孫々に至るまで彼れをしてその慾望を全く絶たしめずんば止まずとの大決心を要するなり、終に日露の爭議は一昨年於て日露外交の談判始まり半年に涉りて、或はモスコに或は東京に會談せんと稱しつゝ、曠日彌久徒らに時局の解決を遷延し、而して彼れ露國は一も交渉の精神なく結局開戦の止むなきに至れるとは、天皇陛下の宣戰の御詔勅に明なる所なりとす

第二は戰爭の目的を知るべし、今回の戰爭は單に勝さへすれば足れりと云ふにはあらず、その目的は昨年二月十日陛下が下し給へる宣戰の御詔勅に詳に垂示せられたり、拜讀審思するを要す、二には國際道德及び國際法の嚴守にして、今の戦は文明の戦なれば國際上の道德、公法上戰時に守るべき事項、中立國の守るべき事項等を知るの要あり、三には列國

の同情なり、露國は横暴なるが故に、列國は吾國に同情を寄するもの多し、英國は我が同盟國なれば我に同情あるは勿論米國と云ひ、他の列國と云ひ、殊に獨佛に至るまでも同情を有せり、佛國は新聞紙上兎角の評ありしも、今や婆羅隊を全滅するに至りし上より見れば、吾人は宜しく佛國が中立を守りて我に同情を有せりしとを認むべきなり

第三は日露の國勢に就て、(一)露國々勢一班、(二)我陸海軍の精銳、(三)戰局の好望を知るべし、即ち先づ露國々勢の一班を知り、次で我軍人が敵に對して優勝の地位に立てるとを知ら、戰爭は陸も海も全勝を得て誠に愉快なる戰局の現象に達しつゝあるは、皆人の知る所なりとす

第四は時局に對する國民の覺悟及び義務なり、これには左の細目あり

- 一、舉國一致堅忍持久
- 二、國民の法律上の義務
 - 甲、兵役及び軍事負擔(徵發)
 - 乙、納稅
- 三、國民の道徳上の義務
 - 甲、軍資の供給
 - (イ) 國債應募
 - (ロ) 獻金
 - 乙、物資の供給

り、而かも堅忍持久の精神に至りては甚だ乏しきが如し、例せば彼の郡司大尉が北門の鎗鎗千島の開拓を企て、都門を出づるの時、これを送る盛況は、墨陀の長堤人を以て填められ、新聞に談話に非常に持擲されたりしが、その後救濟援護の方法に就ては、世人知らざるもの、如く、殊に今回東察加地方に於ける大尉の變事を聞きても、左まで同情の念を起さざるもの、如し、蓋し是れ我國民が何事にも熱し易く冷め易く、事業半途にして挫折せば復び起つ勇氣なく、終局の成果を收むるまで總ての事に耐忍し得ざる、誠に憂ふべき弱點を有するが爲めなり

聞く英人は牡牛の如くあれよと理想せりといふ、牡牛の角闘するや滿身の力を込め命盡くるまで一步も退かず、英人は牡牛が中途に挫折し屈撓するとなきを以て國民の理想とし遂に今日の發達を見るに至れり、吾人も宜しく之れに鑒み根柢ある熱誠を以て、子々孫々不屈不撓の大精神を培養せざるべからず、長くも 陛下が戰局の前途を憂慮せさせ給ひて、屢前途尙は遠遠なりとの勅語を賜はるとは、誠に恐懼の極みならずや、今や戰局の好望を認めたる吾人は須らく堅忍持久の精神を持って、戰局如何に永びくとも五年十年將た無期續戰をも意とせざる底の大決心を堅め、徐に終局の目的を達せんとを期すべきなり

こはこの講話中最も重要な事項なれば、予は茲に我が日露上

- (イ) 軍需品の供給正眞確實
- (ロ) 國富の増進
 - (一) 各種生産力増加の必要
 - (二) 勸勉貯蓄
- (ハ) 軍の後援
 - (イ) 恤兵及び獎兵
 - (ロ) 家族救護各種團體
 - (ハ) 傷病者の救護赤十字社

先づ國民の覺悟は第一堅忍持久と云ふにて、已に昨年十月桂總理大臣へ賜りたる勅語は「前途尙遠遠なり堅忍持久益々奉公の誠を竭し以て終局の目的を達するを務めよ」と宣らせ給ひたるは、府縣郡市町村の官公吏、教育家、宗教家の總てが奉体して一般國民にこの覺悟を益す堅からしむべき大切なる 聖旨にして、我軍が戰勝の度毎に下さるゝ勅語には必ずこの意義を加へさせられ、今回の 婆羅隊全滅の際に於ける東郷大將への勅語にも「惟ふに前途は尙遠遠なり、汝等愈々奮勵して以て戰果を全ふせよ」とあり、これ實に大切なる誠告なりとす、日本人は由來忠勇義烈慷慨憤憤の思想を有するも、事に當りて倦怠を生じ易く、所謂退窟し易き弱點を有すとは、外人の定評にて、我國の具眼者も亦これを認め居れり、日本人は櫻花を理想とする國民なり、故に一朝正義の爲めに身を捨つるの精神は、櫻花の散るが如く頗る淡如た

人の人格の一斑を紹介して國民の覺悟に資せんとす、上人の史蹟は非常なる困難を以て充され一難去れば他難益す加はり來りて、三十年の生涯は恒に艱難困苦と聞はれたり、而してる場合に於ける上人の覺悟は遺文の中到的所に發揮せられたるが、且く今一節を引て示さん、録内十八中興書に曰く

去る建長五年四月二十八日より今弘安二年十一月まで二十七年が間退轉なく申しつより 候事、月のみつるがごとくし彼のさすがごとく云々也

上人が自己の確信主張を貫徹する爲めには、幾多の困難と烈の迫害に對して彌益す勇奮進せられたる状態は、月の盈つるが如く潮のさすが如くなりしと云ふ、吾人國民の覺悟も亦斯くの如くならざるべからず、昨年二月の開戦を三日月に比せば、今年四月は四日月なり乃至十數年續戰せば十五夜の満月の如く、年月加はれば加はるだけ力が増し元氣を旺にするの覺悟を持ち、忠君愛國の思想も潮の満つるが如く年と共に益す鞏固にし、人道正義の爲めには永劫退屈せざる大決心を確立すべし

要するに吾人軍國民の覺悟は 至尊陛下の大御心に答へ奉るに歸着すべし、而して 聖旨の存する所は勅語に在りて明白なり、即ち文明を平和の間に進め行くにあり、而して平和の間に文明を求むるには、時として戰爭を辭するを得ざるあり、苟も國家として存立する以上は武威を持たざるべから

ず、所謂勅語に國威を中外に宣揚すべしとは是れなり、吾人が陸下の御盛徳を頌して允文允武と云ふは即ち此の謂なり適當に國家が發達する以上は、文武は鳥の兩翼の如く偏廢すべからず、所謂文事あるもの必らず武備ありとは之れなり、是れ猶ほ佛敎の傳道法に攝折の二門あるが如し、攝受は文にして折伏は武なり、日蓮一宗は折伏を正規とす、戰時に在ては折伏主義の宗教尤も適應すべし、さりとて攝受を廢すべからざるは世に文武兩道の偏廢すべからざると同一なり、日蓮上人この旨を開目抄に示して「末法に攝受折伏あるべし」と今や日本の武威は嘗に中外に宣揚せられたるに止まらず、實に武勇を以て世界を驚倒せしむるに至れり、今後の日本は宜しく文明を以て再び世界を驚倒せしめざるべからず、是れ蓋し聖旨を奉體せる吾人臣民が造次にも忘るべからざる真正の覺悟といふべし、列國は我國の文明を目して摸倣的文明と云ひ、最近の文明と思へり、予謂へらく然らず、抑我國の文明は根底あり、素養あり、その淵源する所實に千數百年の昔に在り、歴史上實に光輝ある文明を有せり、苟は日本の道義と日本の宗教とにして、世界の人類は未だ曾て之れあるを知らず、近時英國等にサムラヒ宗と命名したるものあるを聞く之れ敢て不可なしと雖もこれを以て日本の道義、日本の文明を代表せんとするは大に非なり、何となれば今の所謂武士道は狹劣なり淺薄なり、古の武士は一面に必らず宗教の信念を

有せり、彼の忠臣楠公の如き、若くは頼朝信長秀吉家康等皆然り、而して後の武士道を説くもの只忠誠武勇の一面を語りて宗教信念の根底を逸失し、遂に武士の心髓を滅却せんとす、今吾人は根底あり素養ある日本の大道義大宗敎を中外に紹介して、我國の文明は摸倣にあらざるとを示し、以て再び世界の人類を驚倒せしめんことを希望す、豈に愉快ならずや、予は更らに是れより我帝國の爲め法華開顯の理想と日蓮上人の人格とを推薦して、日本の文明に根底あることを知らしめんとす

從來吾が國民は日蓮上人の人格を見て、或は狹劣なり暴慢なりとし、或は熱烈に過ぐと思へり、之れ蓋し國民が實の確信なく眞の決心なき小なる島國的根性より推判したるが爲め、斯る誤解に陥りて遂に眞正に上人を仰ぎ見るを得ざりしに由る、而して今や幸にして有史以來未曾有の大戦に會し陸に海に連戦連勝の好果を收め、武威を以て世界を驚倒せんとする勃興の機運に乗じ漸く興國の大陸的の氣風を發揚せんとするに至れり、この好機に當りて茲に上人の人格を紹介するものは、是れ決して宗門的觀念よりするにあらず、偏に國家的觀念の上より國民を警醒して益す國威を世界に發揮せんと希望するが爲めのみ、夫れ上人は一宗門内の人にあらずして、實に日本帝國を代表せる眞の理想家なり、苟の忠君愛國の理想は根底を有し、今の日本人の多くが理想し得ざる底の大見地

に立てり、この根底ある大理想は實に法華開顯の教義より産出したる佛陀の意思に合一せる理想たるなり、日本國民の忠君愛國の思想にして若し斯の大理想を以て根底より築き上ぐるに至らば、國家の力は今日に倍加すべきこと疑なし、我國民は元來忠君愛國の精神に富めるは今更喋々を須むず、然れども學問上より之れに根底を造り生命を賦與するに就て一大留意を要す、若し然らずんば退いて人間の心理作用を窺ひ、苟の奥底に潜める慾求に訴へて、國の爲めに生命を犠牲に供すると、それが果して何の爲めなるかを思ひ、死するとのそれが何となく寂しく感ずるに至るべし、苟は現に出征軍人と彼等の家遺族との精神状態を解剖せば、到る處に苟の實例を示せり、或は曰く我軍人には死後神となり佛となることを教ふるに及ばず、只忠君愛國の精神を鍛錬せば足れりと、之れ所謂今の武士道にして今の軍人は多くはこの精神を以て幸に戰勝の名譽を博し得たるも、而かも人は國家の爲めに盡すと同時に一面に自己の安慰を得んことを欲す、されば喜て死に就く精神的慰安を與ふるところに誠に陸下の大御心にも叶ふべき次第かと思はるれ、然らば日本人固有の國家觀念を適當に發達せしめて理義を正明にし、益すその根底を鞏固に築き上げるに尤も必要なりと思ふ

宗教の中には戰爭を罪惡なりとするものあり、又社會主義非戰爭主義を唱道するものすらなきにあらず、同一佛教中にあ

りても人と争ふは修羅の所行なり、人を殺せば苟の業因に依り地獄に墮つべしと教ふるもの多し、斯の如きの宗義觀念は今日に於ては全く無用に屬するのみならず、寧ろ有害の説なり、又武士道と宗教とは全然反對せり考ふるが如きは頗る不可なり、人道と宗教とは必らず一致し結合し、武士道に向つて絶待の理想を結び付け、死者も遺族も共に喜悅慰安を眞正に抱き得るだけに教ゆると肝要なり、是れを國家風敎の最大要旨となす

先づ日本國民は教育の御勅語を奉戴して道德の觀念を確立すべし

教育に關する勅語

朕惟ふに我が皇祖皇宗國を肇むること宏遠に徳を樹つること深厚なり我が臣民克く忠に克く孝に億兆心を一にして世々厥の美を濟せるは此れ我が國體の精華にして教育の淵源亦實に此に存す爾臣民父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し朋友相信じ恭儉己れを持し博愛衆に及ばし學を修め業を習ひ以て智能を啓發し徳器成就し進て公益を廣め世務を開き常に國憲を重じ國法に遵ひ一旦緩急あれば義勇公に奉じて天壤無窮の皇運を扶翼すべし是の如きは獨り朕が忠良の臣民たるのみならず又以て爾祖先の遺風を顯彰するに足らん

斯の道は實に我が皇祖皇宗の遺訓にして子孫臣民の俱に

遵守すべき所之を古今に通じて譲らず之を中外に施して悖
らず 朕汝臣民と俱に眷々服膺して成其徳を二にせむこと
を庶幾ふ

是れ日本人の道徳軌範なり、吾人は須らく之れを遵守すべき
なり

聖徳太子の時に在りては斯の忠孝道義の上に、尙ほ「篤敬三
寶の」一節を加ふ、而して爾より以來千三百年間吾國民は永
く佛教の信念と忠孝の道義とを維持し來れり、されば昔の武
士は忠勇義烈なると同時に、一方には必ず佛教の信念を有
せりしとは、史上に明白なる所なり、而して人道と佛教とを
接合するとは法華經の人天乘開會の法門にして、即ち法華開
顯の大理想なり、この開顯の大理想は總ての事物を綜合して
一の中心を定め、他の總てを按排し調整し且つ包容するもの
なり、而かも總てを包容するに當りて若しも中心の理想を失
却せば、遂に開顯統一の本旨を失ふに至るべし、印度の佛教
は中心を確立せずして包容を試みたる爲め、遂に却て外道に
破却せらるゝの末路を示しぬ、今後日本が東洋の平和を維持
し徳化を中外に及ぼさんとするには、必らず國家的思想の中
心を確立せざるべからず

法華經六の卷に
若し俗間の經書、治世の語言、資生の業等を説かんに皆正
法に順せん

さも可ならん、苟も文明の時代にありては一日も宗教の信念
なかるべからず、宗教的信念なくしては到底生存競争場裡
に立ち勝利を得ると難かるべし、然るを彼の淺見者流の文明
進まば宗教遂に無用に歸せんなど、漫言せるは誠に考慮なき
僻見なりとす

今相待善と絶待善との干係を示さん、先づ待絶兩善の釋義を
述べんに、凡そ絶待相待の語は他の學術にも多く用ゐらるゝ
に拘はらず、道徳上に此の語を使用せるもの頗る稀なり、宗
教は只絶待とのみに限られ、倫理は相待と見るが如きは、未
だ成熟せざる學人の上に説かるゝ所にして、今一段進歩せば
完全なる人道は、宗教の道徳をも併有せるまでに進化せしめ
て之れを人道教とし、待絶不二の道徳的宗教を主張するに至
らん、佛教に之れを稱して一實諦と云ふなり、今兩善の干係
を表示せば次の如し



相待善とは世間の道徳にて五倫五常を立て自己と他人と相待
するものにして、絶待善とは絶待無限の大善にて佛教に所謂

と説けるは、即ち人道と佛道との接合を示せる一大教訓にし
て、俗間の經書とは世間の經書即ち人道倫理を指す、我國に
在りては教育の御詔勅が正しく俗間の經書なりとす、この倫
理の經書即ち御詔勅の上に説かれたる人道は、正法たる法華
經の絶待の大道徳に順應して蓋と函と相應するが如く克く一
致し調和し接合せるなり、天台の曰く「若し深く世法を識ら
ば則ち是れ佛法なり」と、是れ活ける佛法は活動社會の人道と
一致するの謂なり、治世の語言とは政令國法を云ふ、資生業
等とは生活を資くる業務なり、之れ政令國法及び生産の業務
を開顯すれば、即佛法なりと云ふの意なり、佛教は只經を讀
み數珠を爪繰るが如き形式のみを云ふにあらずして、人生の
本務を全ふすると共に根底ある信念を持つべきことを教ふるも
のなり、然るに或ものは倫理を人道已下に留め又單に生業を
勵めば足れりと思へり、斯かる單なる人道論は諸種の方面に
大缺陷を發見すべし、若し未來觀を捨て只短き生涯のみの上
に倫理を定めば、人生の眞正の安慰は得て望むべからず、今
の學生間に厭世觀に陥れるもの甚だ多數なるを認む、彼の華
嚴の瀧に投じ淺間の噴火口に飛入りしもの、如き、是れ決し
て冷眼に看過すべきことにあらず、是れ即ち時代の一面に潜
める暗流を示せるものにて、世道人心の上に心を注ぐもの、
輕視すべきとはあらず、是れ蓋し眞の宗教的慰安を得ざる
に因由するなり、若し夫れ曖昧野蠻の時代ならば寧ろ宗教な

成佛の善、解説の善を指すなり
俗諦は庸歷諦として倫理と宗教とを分離して見るもの、即ち
倫理を俗諦とするなり
世戒と第一義戒の名は優婆塞戒經に依り、俗間經書と正法と
は法華經により立名せり、而して正法とは皆順正法とて俗
間經書も皆正法に一致し來り、所謂絶待に歸するものなれど、
今は便宜上正法の名を以て俗間經書と區別したるなり
佛道若しくは佛乘とは相待的名にして絶待的に表はせば、
一乘と云ふべく、真諦も亦相待的名稱にして、一實諦とせば
眞俗一諦に歸す
待絶兩善の内何れか一方を廢し一方を輕視するが如きは大に
不可なり、今日の狀態は一面倫理を大切なりと主張するもの
あると同時に、只宗教のみを重んじて倫理を蔑視するものあ
り、尙ほ一步を進めて超倫理を主張するあり、彼の井上巽軒
博士一派は倫理化したる宗教を尊び、宗教の本質は實際世を
益するにありとし、即ち實踐道徳を以て眞の宗教とせり
之れに反して超倫理派は云ふ、倫理派の説く所は、畢竟世間
普通の人道のみ敢て宗教として仰ぐに足らず、吾人にして成
佛善提の智慧だに開覺し、信仰の力だに決定せば不知不識不
言不語の間自から人道に契同せん、されば宗教の餘力を以て
優に倫理を扶植するに足る、宗教の力により如何なる罪惡を
も救済し得らると云ふとは、倫理を破壊するに似たりと難も

宗教の内固より倫理を含み而かも倫理に拘束せられざるの意
味なりとす

斯く兩様に分れて是非を論ずるは、畢竟學者の見解未だ稗劣
なるに因るのみ、若し夫れ佛教の眞意義より之れを云はば、
吾人は人倫の常道を履み、直ちに進んで佛陀に合一せざるべ
からず、然らば倫理は、即宗教なり、宗教は實に一實諦を教
ふるものたるなり

されば人道と佛道を接合する法華開顯の理想を將ち來りて
一方には完全なる人となり、一方には宗教の信念を確立する
と、是れを眞の日本國民とは云ふべけれ、而して積極的生々
的活動的の宗教たる法華經は、實に我が國民の風氣に適し特
性に合し、而して能く弱點を匡救するの力を有せり、日
蓮上人が檀越四修氏に「宮仕を法華經と思召せ」と教へられ
たるは、忠誠を以て君に仕ふるとが直ちに活法華經なりと訓
へたるものにして、皆順正法の大理想を換言し給ひしもの
なり、されば日本の軍人はこの相待的の道義として忠君愛國の
思想を確立すると同時に、絶待的法華經の大道義即ち不滅實
在の觀念を併有せずばあらず然らば一面に國家名譽の戰死
を遂げて芳名を竹帛に垂れ歴史の光彩となると同時に、一面
には菩提涅槃の大覺に到達するを得べし、是れ極めて完全
なる大理想なり大安んなり大道義なり大宗教なり、此に至り
て死者は帝國萬歳を唱へて精神的喜悅の内に死に就くを得べ

を以て五千萬同胞國民を我が愛子の如く慈しみ給へるなり、
是れ恰かも如來の一子地に住し給へると異なるなきなり、故
に君に忠なるとが直に親に孝なる所以にして即ち大忠至孝と
は俱に、陛下に酬ふる報恩的動作を指すものなり、昔平重
盛父清盛の暴性を嘆き忠ならんと欲すれば孝ならず孝ならん
と欲すれば忠ならずと言ひしが如きは、恐くは未だ斯の大忠
至孝の大義は俱に、陛下に對する報恩的動作にして、孝も亦
父母に向ふは小孝に屬し大孝至孝は一に、陛下に盡くすに外
ならざるの旨趣を明らかめざりしに因るものにあらざるなき
か、普通の場合に持ける東洋道德の釋義は忠孝を君と親とに
二別して之れを解するも、獨り我國の倫理觀は古來より主師
親の三徳を具へ給へる萬世一系世界無比の皇室を戴けるが故
に、忠孝を二別して見るを許さず、日本の道德の大本は實に
茲に存す

かゝる道義觀に住し而して高恩を擔へる國民は「一旦緩急あ
れば義勇公に奉じ以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし」との
聖旨を眷々服膺して報恩的實行を怠るべからず、吾人國民が
先祖代々より蒙れる重恩と將來子々孫々の末まで受くべき恩
徳を思はば誰か皇恩の大なるに驚かざるものあらんや
然るに今の世に於て或は徵兵を脱れんが爲め神佛に祈請し、
又之れに守札を與ふるが如き者輩あり、又出征軍人に對し他
彈除分の守札を與ふるが如き、かゝる卑劣なる思想かゝる野

く、遺族も中心より名譽の戰死を喜び、又忠魂の實在證悟を
認めて茲に大なる精神的安慰を得べし
凡る人類が萬物の靈長として誇り得る所以のものは何ぞ、横
目豎鼻直立歩行するが爲めのみならず、能く是非善惡を辨
別し知恩報恩の道德的行爲を行ふが爲めたらざらばならず、
若し此の觀念なく德行なくは何ぞ禽獸と擇ばん、彼の野蠻人
若くは瘋癲白癡者にありては、辨別力なく羞恥心なく放縱淫
肆殆ど下等動物に異ならず、之れ畢竟精神の道德的活力の
括りが弛みて遂に墮落せるものなり、之れを反して知恩報恩
の志を持って向上進歩を計らば、吾人は遂に神明佛陀と合
一するの幸榮を有す

日蓮上人の報恩抄に
夫れ老狐は塚をあとにせず、白龜は毛寶が恩を報ず、畜生
すらかくの如し、況や人倫をや
と示せり、儒道には孝を以て道德の大本とし忠も亦孝の家よ
り出たりと訓ふ、之れ君に對すると親に對するによりその
稱呼を異にするも皆知恩報恩の動作なり、而して吾國民は教
育勸語を拜し「克く忠に克く孝に」との、聖旨を窺ふに上
至尊に對し奉りて克く忠を盡し克く孝を盡すべきの意なり
と思ふ、此處に所謂孝とは吾人の肉體を生める父母に對する
報恩的動作を云ふ小なる孝にはあらずして、吾が皇室は數千
年來祖先累世厚恩を蒙れる君主なると同時に、又仁愛の聖徳

賢なる迷信は、實に國家の品位を傷け文明を妨ぐるものな
り、若しも數千年來の重恩を忘れ只一身の利を思ふて報公の
心なきものは、之れ實に古今無双の嘆ひ逃げの大なるものな
らざるや

日蓮上人曰く「天の三光に身を濡め地の五穀に神を養ふ、皆
是れ國王の恩なり」と、吾人が安眠高臥して幸福の生涯を送く
る所以の根元は偏に君の恩に由らざるはなし、若し之れを忘
却せば忠良の臣民にはあらず、幸に千歳一遇の國難に會し一
死以て國恩に報ふるを得ば、聊か以て皇恩の萬一に報ふるに
足らんか、吾人の祖先は爲めに面目を施すべく子孫も亦以て
永く此の徳を傳承するを得ん、要するに吾人日本國民はろの
兒孫生誕の朝に於ては須らく國體と君恩の尊重すべきことを諭
へて報恩の志を吹込み國民の責務を盡くすべきことを嚴戒し、
瞑目の夕には必らず先づ兒孫を戒めて忠君愛國の觀念を忘る
べからずと諄々として遺言の第一條項に加へよ、かくてこそ
初めて日本の臣民なりと云ふとを得ん
されば今日に於て資財あるものは、國家觀念の上に於て軍事
費の負擔を甘諾せよ、納税を怠る勿れ、國債應募に勤めよ、
献金に、恤兵、獎兵に、軍人家遺族の救護に、傷病者の救
護に進んで力を致せよ、尙ほ戦後の經營、國富の増進に就て
奮勵し國家の目的を成達するとに努力すべきなり
次に死の覺悟に就て一言せん、死とは決して滅亡するの義に

はあらず、世人動もすれば肉體滅すると共に靈魂消散すと思へり、之れ愚の甚しきものなり、吾人の靈魂即ち精神は形なきが故に見るとを得ず、又形なきが故に火にも焼けず水にも溺れず刀を以て斬る能はず砲彈を以て碎く能はず、而かも力あり情慮起り思想動く、之れを放てば法界に充滿し之れを縮めば極微に收まる、靈妙不可思議にして自在に變化す、吾人生れたるとき別れて生じたるにあらず死するるとき亦滅するにもあらず、吾人の精神は人間の業を造りて人間の果報を得、此の肉體を主宰するだけの作用を有す、此の肉體滅するときは更らに新たなる生涯に移るなり、吾人は十界を具足するが故に若し蛙の生活を欲すれば蛙と爲るべく、犬を喜ばば犬と爲るべく、苟の轉變極りなきと恰も車輪の回ぐるが如し、若し我が軍人が七度人間に生れて敵を滅さんと欲せば、彼が忠勇義烈なる動作は眞に人道上の最善最良の功徳を實行したるものなれば、即ち人間に生るゝとを得ん、是れ佛陀が十界の因果法上に説き明かしたる所なり、若し法華開顯の理想を信じて常住不滅の本体を顯はし佛陀の大悟に至らんと欲せば即ち永く常樂我淨の佛身を成就して不滅の大快樂を享受するを得ん、されば死は毫も悲むべきものにあらず、只次の生涯如何を願慮すべきのみ

今や君國の爲めに名譽の戰死を遂げたる軍人は、佛法の因果法の上に照すに復び人間に生ずべきものとす、若し幸にして

法華經に依りて追吊せられ、或は自から法華の信念を持たば即ち常住快樂の大菩提を證得するを得て至樂の境遇に逍遙すべきなり、我が出征軍人は「義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよ」との御詔勅を奉戴して、潔く死に就くものなれば、その行爲は國民の龜鑑たると同時に、神明佛陀の哀護し給ふ所なり、若し我が家遺族者家に留りて安慰を得ずして苟の戰死病歿を聞き之れを悲むの極、忠君の誠節を忘れ、或はヒステリー症に罹り、又は哀傷の餘り狂氣するに至るものありては、眞に遺憾の至りなりとす、然れども精神的慰安を得ざるものは表面は如何に假裝するとも、眞正の安慰を得る能はず、是れ戰時に當り特に宗教的慰安を調ふるの必要ある所以なりとす、我國民幸に前來述べ來れる報恩的、道義的の大觀念を確立し而して死の決して恐るべきもの悲むべきものにあらざるを宗教的に安心せば、出征者としては自己の自分を辨へ決死の覺悟愈よ潔くなりて喜んで義勇奉公の行動に出づべく、家遺族も皆一面に産業に奮勵して益す君國の爲めに盡さんとを思ひ、他面には名譽の戰死を遂げた我子若くは我夫は國恩の萬一に報ひ得て未來永劫大果報の者たるを領會し信知し精神的慰安を得て兩者、此の遺憾を留めず、而して苟の眞正の満足と平和との上に動作するに至らん

今や軍人家遺族に對する物質的救護の方法は世間已に十分の

設備あり、然れども精神的慰安の方法に至りては大に缺くるものあるを發見せり、是れ偏へに我等宗教家が君國の爲めに努むべき天職なりと思ひ、今回各地を巡教してこの講話をなす所以なりとす

以上の外時局に對する經營等の項目に就て講演すべきと多々あるも今は之れを畧し、要するに國民の覺悟は、陛下の大御心に報答するにあり、陛下の大御心は(一)文明を平和に求め、(二)武威を中外に輝かすに在り、而して今や武威は大に揚りて世界を驚倒せしめたり、戰局の前途は勝敗に就ては憂ふべきものなし、平和回復の實現は只時間の問題のみ、我國民は偏へに堅忍持久の精神を堅くし、平和克復の後に至らば我が帝國の責任は從前に倍加するとを自覺し、この國運隆昌の機運を適當に振張せしむべく覺悟し、文明の智識を促進すべきは勿論、文明の善良なる成果を收めんには道義宗教の根底より築き上げざるべからず、茲に於てか道義と宗教即ち人道と佛道の接合を要すべし、然るに注意すべきは世の愚なる教育家等宗教の本質眞價を知らずして妄りに宗教を蔑視し、又愚なる宗教家は人道と宗教とを融合し接合するの考慮なく、相互に衝突するは共に誠めざるべからず、而して道義宗教の接合に就ては消極的非國家的の宗教を斥け、又迷信を改め、非統一の多神の非を知り、孤立的一神の缺點を明かにし、克く國家的觀念に富み又積極的生々的活動的理想と

實力とを有する宗教を信奉すべし、かくて死に就ては實在觀念に於て周足せる教訓を体認し帝國軍人に死の覺悟を興ふるに對しては眞正なる基礎あり光明ある慰安を興へ、苟の遺族の念を絶たしめ大平和大満足の上に安立せしむべし、又實在の觀念は文明の淵源たるを知り、國運發展の根底的基礎たるを領し、以て我大日本帝國の眞正の天職と光明とを世界に光被せしめざるべからず、是れ偏に 聖旨に報答するの微衷に外ならず

伏して願くば寶祚長久、國運隆昌、皇軍勝利、軍隊健全、國威宣揚、平和克復、所願 成辨ならんことを

來 狀 集 (其三) (板野某氏より)

前略、回顧すれば尊師と初めて面識を泰ふせしは、恰も昨年初夏の候に有之、爾來誘掖陶治を蒙り、時々化導を賜はり候ひしも、過去先入の樂因に由りて、御在津中は竟に信仰に入らを得ざりし事の、如何に愚かのわざなりけん、遺憾にたへ申さず候、まはれ、講話會放談の中に於て、又尊師御講談の折節に、耳底に残り候大慈の聲の、大に善機縁となり、祖善拜讀の助を得候て、昨今彌々法華妙法の有りかたきを經驗仕り、欣喜從隨實に手指足踏を知らざるの感有之候、不思議や身心共に再生の思仕り、見るにつけ、聞くにつけて、凡て菩提の種ならぬは無之、昔日の我に非ざるの感有之かくまでも崇を御教なりせば、更に々々歡喜の思胸に湧き候、尊師御講談、爲國、爲衆生救導の聖職に當られん事を、欣喜の余り感復申述候、敬白

日什上人置文諷誦抄卷上

講師、齡八十老比丘 阪本 日恒 講演
増田 聖道 速記

其十一

顯提婆龍女之得益。奏一乘妙法之流通。此の二句十六字は法華經述門の提婆達多品の大意を述たる文で有ます、上の一句八字は所益の人を挙げ、下の二句八字は能益の法を明したて有ます、其所で釋尊が法華經の御説法の第十二番目に此の御品を御説になつた、來意は上の十番目の法師品と、十一番目の寶塔品と此の兩品に於て、如來の滅後に此の法華經を流通する人の功德の深大にして、又福德を得る事の尊重なる旨と、及び利益を與る事の廣大なる事柄を説きたるに就て、其證據として、往昔の提婆達多といふ人が此の法華經を弘めたる其功德に依て、今日此の法華經を説法の會座に於て、成佛して天王如來と申す尊號を得たる事蹟を擧て、靈山一會の大衆に如來の滅後に此の法華經を流通する事を勧めたるが故に、法師品寶塔品の次に此の提婆達多品を御説になつたて有ます、此品にも又二ヶの諫曉があつて流通を勧めました、一には五逆謗法の惡人たる提婆達多か、此の法華經の功德利益を得て成佛して天王如來の記前を被りたる事を以て、大衆を諫曉して流通を勧めました、二には幼少なる愚痴

の龍女が、此の法華經の功德利益を得て成佛して南方の無垢世界に於て成道したる事を以て、一會の大衆を諫曉して如來の滅後に此の法華經を流通する事を勧めました、此の提婆達多品を講説しまするに、大段二科の法門が有ます、此の品の最初の經文より去て生佛前蓮華化生の文に至るまでは、往昔の提婆達多か此の法華經を弘通したる事蹟と、釋尊が此の法華經を信じて成佛したる履歷を説て有ます、次に於時下方多寶所從菩薩といふ經の文より去て此の品の終りに至る迄は、今日の文殊師利菩薩か大海の龍宮に入て法華經を弘通したる事蹟と、八才の龍女か此の法華經を聽聞したる功德によつて成佛したる履歷を説て有ます、左すれば此の品をば提婆龍女品と稱へねばならぬて有ます、今は且く初の經文の所説に從て提婆達多品と題號を立てたて有ます、偕今の諷誦章の上一句八字を講説しまするには二種の意味が有ます、一には今昔相待して影略互現の意に約して講すると、二には今日佛在世の一方に約して講するとの二義で有ます、先初の義を辨しますれば、昔の提婆達多は法華經能弘の導師で有ます、また昔の釋尊は此の提婆達多の弟子で有ます、昔に約すれば又今日に約すれば、文殊師利菩薩は法華經能弘の導師で有ます、龍女は此の文殊師利菩薩の弟子で有ます、今日に約すれば師の方を影として略し、弟子の方を跡として書き現はし

て提婆龍女と御書になつたて有ます、是が一義、又今日佛在世の一方に約して辨しますれば、五逆謗法の大罪人たる提婆達多は法華經の會座に於て天王如來の記前を蒙り、愚痴の龍女は法華經を聽聞して南方無垢の成道を遂ました、此の二人は俱に法華經の利益を得て成佛の本懐を題しましたから、題提婆龍女之得益と御書になつたて有ます、是が一義で、此の二の意味が有ます、然れども初の影略互現の釋義は巧みなる事は實に巧にして面白き釋義なれども、題得益の三字の文に對しては其釋義が疎遠で有ます、依ては後の釋義を正として宜しいので有ます、奏一乘妙法之流通文 奏の字は進むと讀ます、一乘妙法と申すは釋尊一代聖教の中に於ては、純圓一實の法華經のみ一乘妙法と申します、餘經は皆兼但對帶の鹿法にして決して妙法で有ません、華嚴の如きも一乘圓教を説といへども、別教と申し鹿法を兼ね加へて説て有ます、れば兼の鹿法と申します、方等會の如きも一乘圓教を説といへども、藏通別と申す三の鹿法に對して説て有ますから對の鹿法と申します、般若會の如きも一乘圓教を説といへども、通別二教の鹿を帶て説て有ますから帶の鹿法と申します、此の鹿法は成佛得脱の法では有ませんから法華經の序分の無量義經に終不得成三無上菩提と説て大に嫌て有ます、此の法華經は唯一佛乘とも唯一乘法とも説て兼但對帶の過は少もなく純圓一實の經なれば妙法と申します、妙法獨り成

佛得脱の法なれば、若有二聞法者一不成佛」と説て佛自夫に稱歎遊して有ます、流通の二字は流通と讀んで法華經述門の正宗一乘妙法を滅後に流通して廣宣流布せしめ、一切衆生の成佛得脱の功德を奏し進めたる事を奏一乘妙法流通と御書になつたて有ます

迹化諸聖求役經自述惡世之方軌

此の二句十四字は法華經述門の勸持品の大意を述た文で有ます此の文の上の一句七字は發誓弘經の人を挙げ下の一句七字は正しく弘經の方軌を明したる文で有ます、偕上の寶塔品提婆品の次に釋尊が此の勸持品を説きたる來意を辨しますれば、寶塔品の三ヶの勸宣と提婆品の二ヶの諫曉と已上五度の風詔に驚て迹化二萬の菩薩達が各自誓願を發して滅後惡世の中に於て此の法華經を弘通致さんと申し上げましたから、釋尊の寶塔品提婆の二品の次に此の勸持品を十三品目に御説になつたて有ます、故に宗祖日蓮大聖人が此の事を開目抄の下卷七丁に已上五ヶの風詔に驚き勸持品の弘經有と仰せられました、是が寶塔品提婆品の二品の次に此の勸持品を説きたる來意を明したる妙判で有ます、迹化諸聖求弘經文今此の一句七字の文を消釋致しますれば此の勸持品に於て滅後惡世の弘經を發誓したる迹化の諸聖には五種の衆類が有ます、一には二萬の菩薩衆二には五百人の阿羅漢衆三には八千人の聲聞衆四には六千人の比丘比丘尼衆五には八十萬億那由他の菩薩衆已

上此の五種の衆類の人々が此の勸持品に於て滅後惡世の弘經を發誓したて有ます、此の五種の人々の中に於て第二の五百人の阿羅漢衆と第三の八千人の聲聞衆と第四の六千人の比丘比丘尼衆の此の三種の人々は孰れも初心始行の菩薩なれば此の士の惡世の中に此の法華經を弘通するには三類の強敵を引受て其大難を忍びて任途ことが出来せんから、他方の柔和温順の國土に於て弘通致したき旨を發誓したる事有ます、其所で第一の藥王菩薩大樂說菩薩等の迹化二萬の菩薩衆と第五の八十萬億那由他の菩薩衆の此の二類の人々は十分學事も修行も積功累徳して阿惟越致地と申して、初住眞因已上の不退轉の高位に登りたる斷惑證理の大菩薩なれば、佛の別命を蒙り此の娑婆世界の五濁惡世に生れて三類の強敵の大難を忍び堪へて此の法華經を弘通致さんと大誓願を發されたて有ます、然れば今の誦諷章の迹化の諸聖と御書になつた、第一の二萬の居士と第五の八十萬億の大菩薩の此の二類を指したて有ます、倍爰にて學生達の得意のために一言辨して置ますが、法華經は一切生皆令入佛道とて十界各々差別の人々か此の法華經の會座に來至しますると同一鹹味の唯一佛乘の人となつて、人天二乘七方便等の名目の有るべき理由はなき筈の事有ます、前て辨じた五百人の阿羅漢衆八千人の聲聞衆杯と其名目を擧たるは此の法華經の會座にて羅漢果や聲聞の三向三果の得益が有たと申すては有まん、其名目のある

所以は爾前得益の阿羅漢や聲聞の名目を所開のために擧て汝等所行是菩薩道と能開したる者有ます、阿羅漢や聲聞緣覺等の名目が有ましたとて、法華經にて阿羅漢果等の利益を得たる事と思ふては成せせん、先は得意の爲め發言しました、自述惡世之方軌文此の惡世と申すは滅後末法の五濁亂漫の世の中の事有ます、方とは法なり、軌とは則なりとて、弘經の法則の事有ます、倍此の勸持品の最初の經の文に、藥王菩薩及び大樂說菩薩等の迹化の二萬の菩薩遠か略して弘經の方軌を述べましたる文に、我等當起大忍力乃至不惜身命と斯の如く發誓致しました、其所以は釋尊か上の法師品に於て委く惡世末法の弘經の方軌を御説きになりたる其仰せに、汝等此の法華經を弘通せんと欲せば必しも柔和忍辱の法衣を着して弘めよ、柔和忍辱なれば一切の大惡事を遮して敵對する者なし、大慈悲の法室に入りて弘めよ、大慈大悲なれば一切の大善根を生して諸人皆歸伏す諸法空の法座に坐して弘めよ諸法空と觀すれば愛情私心の妄想を盡かし、一切衆生を平等に利益する事を得べし、此の通に三類の方軌に依て此の法華經を弘めよと懇數に説て、藥王大樂說菩薩等の八萬の居士に御告になりました、其時八十萬億那由陀の居士方も傍に在て此の弘經の三軌を聽聞して居ました、上の法師品に於て此の如きの次第があつた故に、此の勸持品の長行に於て藥王菩薩等の二萬の居士達が署して惡世弘經の方軌を述べし

て、此の品の個頌の二十行の經文に至て廣く三軌を述て、惡世末法の弘經を發誓したるて有ます、依て今の誦諷章に自述惡世之方軌と御書になつたので有ます、此の三軌の法門には數々の法義が有ます、今はたゞ其一端を擧て辨じたので有ます、詳しき事を知らんと思はゞ此の御品の法華文句の本末の書を結いて御覽あれ、此の御品には三類の強敵の事や、其他の法義も有ます、是等の事を知らんと欲せば、誦諷章註釋上卷四十七丁已下を往見するがよろしい

蘇生の道
木村義明
『妙とは蘇生の義也と申は活かへる義也譬は黃鶯の子の死するに鶯の母子安と鳴は死せる子還て活かへり鳩鳥水に入れば魚鱗悉く死す犀角之に觸れば死せる者皆活かへるが如し爾前の經々にて佛種を燃て死せる二乘闍提女人等妙の一字を持ちぬれば燃れる佛種も還て生ずるが如し』
(法華題目抄)

我此土安穩天人常充滿の文に就て或人の問ひに答ふ 憲 洪

我とは、我々の我に非らずして、佛の我也、九界に非らずして、佛界也、宗師は、我者佛界也、我者釋尊也と仰せられたり、されば、この文の我は、所謂佛所顯三身即一の應身如來也、此土とは、佛所住の土にして、九界の土に非らず、我は正報にして、此土は依報也、宗師は、我此土安穩者國土世間也、と仰せられたり、されば、四土即一の靈山淨土を、此土と云ふ也、安穩とは字訓の如く安らむ穩かにして、三災四却の危險を出でたるを云ふ也、權小は消極的にして空寂を旨とす、此理の安穩也、此經は、積極的安穩にして、實在を旨とす、此事の安穩也、次下の經文に、天人常に充滿せり、園林諸の靈閣、種々の寶を以て莊嚴せり、寶樹華果多くして、衆生の遊樂する所なり、諸天歌舞を撃て、常に衆の娛樂を伴ひ、曼陀羅華を雨らして、佛及び大衆に散す、これ則ち最上實在の安穩也、天人とは、釋に住行向の三十心は、是れ人なり、十地は、是れ天人なり、また、第一、義天に昇らざれば、以て人と爲す人なり、普通の天界の中の人と異なる也、宗師は、入ると云ふは、天人の二界也、天人に非らずして、佛界所具の天人なること明也、常とは無常に非らずして、常住也、充滿とは、字訓の如く充ち滿つる也、所詮この二句は、大慈大悲の深遠平尼佛の淨土は、災火劫風の憂なく、安泰にして穩和也、無上の正道を證得するもの、充滿せる最上妙樂の境也、

全体死亡とか生活とか云ふことは何な状態を指して云ふのであらふか、此から先き定義を決てかゝらねばならぬ、無論死亡とは身軀と精神とに知覺作用を失て少しも活動ことの出来ない打ても痛みを感じないもので、恰も時計の止た様、草木の枯朽た様なもので皆様は先刻御承知のことである、夫から生活とは身軀も精神も能く動くので、四支五体は勿論眼も動く口も動く心も動く、見る食う種々の事を思考る、從て種々の作用を爲るので口も喋るし打てば痛い、是が則ち生活する状態て是も皆様能く御存じてある、則ち生死の別は動く動かないとにあるので、動て居ると云ふのは生活の定義で、動かなくなつたと云ふのが死亡の定義であると思ふ、扱て斯様に死と生との定義を決て置て、夫から此世界天地始てよりの凡ての人類、則ち國常立尊の昔より今日に

到る迄、生れては死に生れては死だ所の世界中の一切の人々は、何百萬億の人數であらふが、此人々は果して死に仕つたのであらふか、今日未だ生活して居るのであらふか、又今日世界に現存せる人々、則ち十四億の人間は、皆悉く死して居ないか或は活て居るのであらふかと、云ふことを動くと動かないとの定義に依りて、研究し判断して見たならば非常に興味ある問題であらふと思ふ變な矛盾した話の様ですが然し又た特別の論理法があるので、「請ふ槐より始めよ」と云ふことがありますから、此問題は先づ拙者から研究の手を付けて見ませう拙者の研究の結果から判断しますと、昔の人でも死だ人は勿論多いが今日未だ立派に生活居る人も仲々少くない、中には非常な精力と威望とを以てドン／＼世の中に働いて居る人もあります。夫から今日現存の人人でも中には或は生活して居る人もありませうが、大底は死に居る様であります。何故我々は死に居るのであらふか、我々は立派な身体を有て飯も喰ひ動ても居る、夫が死に居るとは仰も如何な論理から割出したのであらふか

然し此に疑問がある、我々か動くは動て居ても自ら動て居るのであらふか、夫とも或る他の者から動かされて居るのであるまいか、我々が動く動機及び何の爲めに動かすと云ふ其目的に向て調べて見たならば直く解かることであらふと思ふ元來人間の究竟の目的は何處にあるかと云へば夫れは佛陀

ので、盲目的行動と云ふのは此れである。彼の所謂の死だといふのは盲者が被れて斃れたので、幽霊の形が消へたのである彼等の所謂の生活とは水の上へ字を書く様なもので、生て居る中は形がある様であるが死してしまへば直く消る、何の形跡も印象も遺さない。成程生て居る中は何の太郎兵衛様だとか伯爵様だとか、やれ富豪と候の學者で御座ると、矢鱈に感張り散らして種々な悪謀を爲るけれども、要するに幽霊の蠢動の消してしまへば人生に何等の功蹟も遺物も遺さない。彼等の感張りは空感張である、彼の働は空働で、骨折損の疲勞まうけ空事徒勞である、「人生は墓無し」ものであるとは此事を云ふたのであらう、畢竟彼等の生活は金剛不壊でないからである、我々の人生は是で可いのであらうか、餘りに薄弱で心細くはないであらうか、あゝ我々は如何にせば可いのであらうか、斯様に氣が付て見るとハタと當惑する、途方に暮れるのである。然し斯ふ考へて居ても方は付かない、何でも活返る方法を見付なければならぬ、永遠の生命、不朽の生活を得なければならぬ、さもなければ我々は地獄へ行かなければならぬ、是は迂回して居られぬ、然らば活返るの方法即ち蘇生の道如何。

我々が本心を失たのは毒の爲めである、惡魔の中毒で我々は死たのである、實に惡魔は恐いものでベスト菌より猛惡である、勿論醫者に懸らなければならず、薬も吞まなければ

の境界にあるので、佛に成る佛の位置に進て佛の世界を作るが人間の目的であるのだ、然るに我々の云爲行動は此目的に向つた道を歩まずして、飛でもない方角違ひの仙氣道を歩いてる、此は我々が何者かに正さ道を塞れて自然と岐路へそれたのを氣付かず居るのである、向て行く方角が違て居るからして佛の世界へ行かずして地獄へ行て仕う様な結果となる。即ち我々の動く動機は惡魔と云ふ者の勧誘に依りて動くのであるから、目的地は否でも應でも地獄と云ふ事に決定てくるのである、底て人間元來の目的とは非常に違て居る、元來の目的にはすれた原因は惡魔にあるので、惡魔の爲めに我々は心にもない事を爲て居るので、畢竟我々は惡魔の爲めに作働され、動かされ、飲され、喰され、曝らされて居るのである。我々は自分の發意で動くのではない他から動かされて居るのである、我々の本心は死に居る或失本心の者である、此に於て我々は立派に生活して動いて居るとは云へなくなるさては死に居ると云ふ方が至當ではあるまいか、そんな事があるものか我々は立派に生活して居るではないか、それが證據には我々は精神と肉体の自然的要求に依りて自ら動て居るものであると云ふものがあらうけれども、夫は負荷の理屈で良心の社會へは通らない、我々の眼から見れば今日の社會は地獄て人は皆亡者である、幽霊の寄集りである故に爲ること作すことに一も目的がない、杖も持たない盲者が當所もなく歩いて居る様なも

ばならず消毒もしなければならぬ。然かし惡魔の毒に中た業障の病を治すには普通の醫者ではいけない、博士も博士量の大醫師釋迦牟尼佛、薬も藥是好良藥の妙法蓮華經でなければ治らない。勿論病中の養生も爲なければならぬ、一我々の病は惡魔が原因であるのだから、先づ此惡魔を對治せんければいかん、惡魔とは何ぞ無明の煩惱である、是を對治するに就て法華經壽量品の御醫者釋迦牟尼佛に絶待的に依頼をし、而して妙法の藥を怠らず服するのである、此御醫者は中々の大慈大悲で必と治して呉れる、夫には種々の注意があるのて、先づ第一に再び煩惱の微菌に感染しない様にと注意する、煩惱の微菌とは何であるか、先づ汝の情欲を制へよ汝の強欲を去れよ、汝の淺慕なる名譽心を却けよ、汝の不當なる利欲の心を却けよ、汝の嫉妬の心を却けよ汝の瞋怒心を去れよ、而して汝の心を平かに和しく柔しく静かに冷かに持てよと教る、夫から精神の健全を圖る爲め滋養分の食事と運動とを注意する、滋養と運動とは何であるか、汝は佛を信せよ佛の大慈大悲を信せよ、妙法を持てよ、而して汝は何物にも懸念する勿れ、必ず我は佛果に到ると信せよ、汝は汝の心に出來得る丈慈悲の心を起せ、汝の智識を養へ、人の愚を笑ふ前に先づ汝の愚を省みよ、人の善を見る度に汝の善を進めよ人の賢を思ふ毎に汝も齊しからんことを思へ正しき道には勇て行け是れ、菩提に至るの道なればなりと、我々は此注意

を守らなければならぬ。此精神さへ失はなければ無論蘇生
ることが出来るのである、我々の病氣は活愈のである、如何
云ふ風に治癒か、此も一つ説明して見たいと思ふ。

第一我々は哲學的宗教的に蘇生する、第二に人格的徳的に
蘇生する、哲學的とは如何であるか此は教義上から理論上から
我々の心の中の佛種の蘇生するのである、一念三千て宇宙の
眞理から推して行けば、關提惡人の我々でも心の中には必ず
佛の種子が具て居る、夫れを我々は知らずに居たので、如
何しても此極惡の塊り罪障の結晶たる心と肉体とを捨て、更
に新しく淨き佛體を求めなければならぬうしななければ佛に
は成れないと思ふて居たのであるが、此は大變な間違ひであ
つたのだ、事に依ると此汚穢い身体が其儘すく佛であるかも知
れない、凡夫即佛、煩惱即菩提、生死即涅槃、結業即解脱
と云ふから、此儘我は佛であると大に威張ても差支ないかも知
れない、而し此はチト悟り過ぎた話で、天台大師の語に依
ると、我々は佛は佛でも素法身と云ふて、佛の種質ではあ
るが眞實の佛に出來上て居ない故に佛たる作用が少しも出來
ない、依然として凡夫の作用である、玉ではあるけれども琢
磨ないから玉本來の光輝を放つことが出來ない瓦礫苦多石と
同じである、是れては、凡夫即佛我は佛様であると威張る譯
にはいかない、是道理を説て能く修行せよと教へたのが釋迦
牟尼佛で、其説明書は法華經である、故に佛の教を信じて法

懺悔錄

野茨花生

四 罪

我は罪人なり、罪ある事を自覺す。罪を究むべきか、はた
罪を贖ふべきか。世尊教あり、曰く、もし人ありて、毒箭に
中でられんには、唯徒に箭の性質と、箭の射手とを究めん
よりも、寧ろ進んで治癒の方法を求めて、之に塗るに良藥を
以てすべしと。さらば我は、今、罪の應報をうべく、善を
なすべく、はた佛を祈るべきなり

借問す、掏盜に捕はれしものは、禁錮によりて其の過罪を
贖ひうべく、又淫姦に罰せられしものは、囚獄によりて其の
臭穢を消盡しうべきか。我は罪に身をせめられつゝ、唯漫
に死に行く、改悔薄命の子に同情し得ざるなり。命終りたれ
ばとて、いかてか長への罪の消ふべき。誠の懺悔は心よりの
再生をこそ要すれ、肉の形骸や、肉の靈心には、關らぬもの
なり焉

さらば我は善をなすべく、贖罪に身を没すべきか。いかに
して、何によりて。我が周囲の思潮、我が周囲の社會は、
凡て之れ罪惡と、妖魔と、誘惑との塊なり。未だ東西をも
辨へぬ無垢の幼兒を捕へて、無慘や、之に墮落、淫代の惡風
を教へ、詐欺、掏盜の惡行を迫る者は、實に今の社會にあら

華經の説明の如くに修行するのは、恰も死た佛種が蘇生した様
なものである、爾前の經々で我々に佛種のあることを教へず
して、此汚穢しき体を捨なければいかんとか、或は此世界は
いけないから外の世界へ行かなければ佛に成れぬなど、脅迫
たのは、我々の佛種を火で焦り殺した様なものである、夫を
法華經で焦た種から新芽を生した譯であるから、「二乘關提
女人等妙の一字を持ちぬれば、焦れる佛種も還て生るが如し」
と日蓮上人は仰たのである、要するに是は哲學的眞理、教
義の一念三千論から判斷したる佛種蘇生論である。

印度の古語

旅にての友は知識なり、家にての友は眞妻なり、又病みては藥を友とし、死
しては正法を友とす
貪欲は惱患を生じ、愛着を牛じ又無明と困惑を牛す貪欲は罪惡の源なり
波羅門の力は知識なり、帝王の力は兵馬なり、バイシヤの力は富饒なり、
又スードラの力は卑賤なり
父に孝なるは子女なり子女を保育するは父なり、又信賴すべきは友にして
満足を興ふるは眞妻なり
未來を慮る者は榮へ未來を捨る者は滅ぶ
失意に我を捨てざるは誠の友なり、無明に我を導くは誠の法なり
水は如何に熱するも復冷に、假の榮華は頼み難し矣

ずして何げや。心より改悔して、せめてもの贖罪にもと、
正業を懲慕ふ可憐の罪人を強ひて、再三、再四、魔扇、暗黒
の内に引きづり行きつゝ、彼をして身の不遇に人知れず萬石
の血涙を注がしむるものは、實に今の社會に非ずして何げや。
實に社會とはかゝるもの、人とはかゝるものなり。表には綺
羅錦繡、美々しうも装へども、やがて一步退いて、其の背後
を窺へば、あはれ臭穢、汚濁、見るに堪へざるもの比々皆然
り。かつて罪なき者彼を打てと、誠められし機檻山の晨に、
よく頭を上げ得しもの、果して幾人かありし。罪惡の毒流に
身を投じ、妖魔の大海に身を捕はれつゝ、我も亦罪人の一人
として、心よりの善事を、希ふ、誠や、石に油を絞ると云ひ
しも、之よりは遙に容易からんか。加ふるに我は飽迄罪に穢
れし罪人なり、鉛には切砥琢磨、遂に銀光を望み難く、愚夫
には拮据黽勉、遂に聖賢を待ち難し矣。四周濁らずとも、社
會穢れずとも、我は鉛なり、我は愚夫なり、我は罪人なり。
我には遂に誠の善事と誠の贖罪とを期待し難からんか。吁々
悲哉、我は善を欲して、善を能はず、改悔を呼んで、改
悔に入り得ざるなり。我とても時には誤つて善をなし誤つて
人らしき處行のなきにしもあらず。疾風荒れ、狂ひ、怒り、
叫ぶ所、其の中又自ら静寂の存するあり、激浪岩を噛み、
岸を打ち、舟を碎く所、其の中又自ら平和のなきにしもあ
らざれども、我は心より澄みし改悔の子にあらず、我は自然

本然の素性に罪を呑み得ざる薄命兒なり。我が時々慈悲善根は、誠に爪上の土にも比すべし、稀に善事と名け得べき者すら尚人の世の汚を存す。善行によりて過去の罪を贖ひ得べしとは、あはれ、我が身にとりてはありて甲斐なき空蟬の之あるが爲に、春曙、秋宵、更に一層の斷腸の思を増すなり。馮。覆水盆に還らず、破鏡再度完からじ、一度罪に穢されし我が過去の生涯は、譬へば白絹の墨に汚れしにも比べつべし之を焼き盡すに非ざる限は、遂にその黒穢を去るべからず、之を織りなほすに非ざる限は、遂にその純白を望み難し矣。善行は果して我を焼き盡すものか。良爲は果して我を織りなほす者か。改悔贖罪の希望も、あはれ我には名のみ空しき形骸にすぎずして、誠の純白や誠の再生は望み得られず、我は善に身を没してだも、尚煩悶を欺く能はざるなり。悲しきかな。

私は御佛の大慈大悲を、希ふの一途あるのみ。さはいかにして？、何によりて？。いづこにかましますやらん、大悲の御佛は、何邊にかましますやらん、大慈大悲の御父は、慈父ましませし折には、不孝の子我は、御慈悲に背き、御訓戒に逆ひ奉りつゝ、悔ひて返らぬ恐ろしの淵に身を投じ終りつ。あはれ今に至りて何の懺悔も今に至りて何の醒悟も。我は足疲へぬ御父に赴く能はず。我は眼くらみぬ、御父を拜する能はず。我は佛性を焼きぬ、御父にすがる能はざるな

だも、よく静かなる能はざるべし矣。

私は激しくも懺悔に身をせめられて、失意煩悶に、悶ふる厭世の子たらんよりも、遙に、罪を自覺し、罪を改悔して、大に慈悲を思ひ、善根を修むる進取活動の子を尊ぶ者なり。罪を悔ひたればとて、之を實現せずんば果して何の價かある、胸中秘藏の妙法は未だ救世の利益なきが如く、心に悶ふる丈にては、或は同情は呼び得んも、尊敬に價せざるべし。我は同情に衣食するを好まず、哀憐にかくてあるを賤むる者なり。女々しうも泣言を連ねて、人の情みど、人の情を誘ひ求めつゝ、當然に受くべき慘害に苦します、當然に力むべき任務を果たさざるが如きは、誠に男子と、改悔の子とのなすべき所以に非ずして、我はかくて安穩ならんよりも、寧ろ罪に安するの遙に男らしきを賛せんと欲するなり、誠に罪を悔ひなば何が故に大に善を思はざる哉。人を苦しめしと悔ふれば、更らに人を救はんと企て、人を誤りしと慙づれば更に、人を訓むんと思ひ、偽に充ちたりと氣づかば、更に正義に輝かんと勉むべし。我は罪人を賤しめず、我は改悔の子を尊ぶ。誠にその罪を自覺し、誠にその穢を厭みて、あらゆる誘惑と、あらゆる強迫とに打ちかちつゝ、滔々たる濁り濁りし末世汚濁の罪の世の中に毅然として、善を思ひ、善を修むる改悔健闘の子は其心の清淨に、其の勇氣の熾烈に、其の謙見の高遠なる、豈現時軟弱の淫佚社會にありては、誠に珍とすべきに

り。悔みても悔みても今ははや手段悉くつゝぬ。あせるとも悶ふるとも、狂ふとも、遂に何の甲斐なからんか。吁々

五 命

快樂を希はく、却て快樂を忘るべく、尊敬を得んには、却て身を低うすべし。誠の懺悔や、誠の贖罪は、罪と離れ、罪と距りてこそ、初めて達し得べきなれ。求めて罪の應報を受けんにも、胸中罪を忘れ得ずんば、誠に心安まるの折なかるべく、求めて善根を積まんにも、贖罪をとの心失せ得ずんば、誠の安心は望み難からんか。人は境涯の如何を問はず、心性の靜動に關はずして、常に善を思ひ、善を修むべきなり、命ある限りは食事と離れ難きが如く、身のかくて存する限りは常に善と遠ざかるを許さず。心に痛みあればとて、身に強迫の存すればとて、はた善根の報の望み難ければとて、片時も食を廢し、善根を忘るべからず。もし過去の生涯を救ひ得ずんば讓て今後の行末を清うすべく、もし根本の強迫を脱れ得ずんば、力めて眼前の行を莊嚴すべきに非ずや。罪を贖ふと、善を修むるとは、自ら別種の問題なり。たとへ如何なる事情の存すればとて、吾人は常に善を思ひ、善を修せざるべからず。病中尙箸を捨てず、臨終に尙口を塞がずして、而も吾人は罪のなやみに善を忘れ、罪の威嚇に善を拒けて尙可なるべきか。我は信ず、もし人にして全く善を忘れ、全く懺悔を斥けて、而も尙心の働の息まざらん限は、必ずや分秒を

非ずや、我は罪に悶ふる苦悶渴望の子を斥くると共に、罪と戦ひ、罪と闘ふ改悔奮闘の子を尊崇せんと欲して、我は罪人萬歳を叫ばんと欲せざるを得ず矣。元より罪あればこそ吾人は人界に生れしなれ、何等かの機會に、必ずや一度過去の大過罪を自覺し、慙愧し、改悔せざるべからず。僅か計の罪過や、僅か計の汚濁は、之を過去と、現在と、未來との長き罪惡の歴史に比べ、之を慙愧、思善、勇ましうも罪と闘へる正義、堅忍の心に比べては、實に大海の一泡沫とも云ひつべきか。よし身は現社會の罪人なり、身は近き過去の惡人なりとも、之によりて眞乎に自己の迷と、罪と、穢とを懺愧し得て、専念に正義に向はく、誠の改悔健闘の子は現代稀に見る所の尊崇すべく、畏敬すべき者に非ずや。我も亦改悔健闘の罪の子なり。直接には罪と離れつゝも、大に慈悲を思ふて善根を積まんと欲す。誘惑の大なる大に可し矣。以て我が健闘の光輝を更に大ならしむべく、強迫の激しき益面白し矣。以て我が善根の光彩を更に莊嚴し得べし。我は初めて安穩の地を得、我は初めて爾後の行路を見出したり。悦哉、々々。濁り、濁れる。四周罪惡の社會に反抗し、激闘して、我は善と、改悔との爲に一身を捧げんと思ふ。我が背後には怨と、憎と、劔との從へるあり、我は身の最後を自覺し、我は平穩、臨終を望まず。我は改悔健闘の爲に世に捨てられ、正義善根の爲に世に容れられずして、而も尙世を救ひ、世を愛せんと欲する

なり。我にさく者は、やがて我を捨て、我を捨てる者は、やがて我を憎まん。されど我は尙我を捨てる者と、我を憎む者との爲に身を亡して、正義と善根と懺恨とを普く満天下に勸めんと欲す。之れ我が生命なり、之れ我が住宅なり、之れ我が衣食なり。

(未完)

宗教は女性なり

古定 不新

▲世の中はとかく硬ては其處に何の趣味もない嘗に趣味がないのみならず時として此硬い爲に殆ど世の中が硬殺される様なことがある

▲政治や経済や實業は硬いが然し此硬いもの計りては國家は治まらない即ち宗教の如き軟かなものがないと國家が内省的精神的發達をしないのであるそこで私は政治や實業や經濟は硬派であつて宗教や文學などは軟派であつてそれが女性であると思つてゐる

▲男性のみの家庭は何となく荒々しく騒々しいものであるが若其處へ女性を加はれば何となくやさしさが加はりしとやささが加はり、静さが加はるのであるそして其家庭にいひしらぬ一つの趣味を生じて來る男性の價値は女性に依つて認められ女性の價値は男性に依つて認められる恰度それと同じことで政治や實業の男性の荒々しく騒々しいのは宗教の女性に依つて静さ

價値をたもつ所以ではあるまいか

▲然るに今やそれが反對の傾向を示して居る宗教問題が科學や哲學に依つて左右せられて居るのは果して宗教問題の骨子に於て居るのであらうか宗教が科學の外套を着たり哲學の羽織を着て居るのは恰も女學生が麻髪を結つて洒々として、さてはまた海老茶の袴を穿いて歩く様なもので麻髪が女子問題の骨子でないと同じく宗教の科學裝も宗教問題の骨子でない海老茶袴が女子問題の骨子でないと同じく宗教の哲學裝も亦宗教問題の骨子でない麻髪をとり海老茶袴をとつて其處に女子の眞價が現れると同一く科學をとり哲學をとつて其處に宗教の眞價があらはれるのである女子の美は其性に固有せる静かさ、しとやかさ、やさしさ、を遺憾なく現すに依つて眞の女子を認められると同じく宗教の靈なる所以も其固有の性能たる静かさ、やさしさ、しとやかさ、を遺憾なくあらはすに依つて認められる

▲國家の慘憺たる苦闘を経たる後には必ず大いなる慰安がなくてはならぬ今や國民の總ては大いに疲れて居はしないか此を慰めるものは女性でなくてはならぬ否宗教でなくてはならぬ

▲宗教の慰安は將來に來んとする戰爭後の日本に必要なのである尙も家庭に女性の存在することを否定せぬものは國家に宗教の存在するを是認すべきである

を加へしとやかさを加へやさしさを加へるのである國家は一大家庭であるとするれば政治の男性と宗教の女性とは乾度調和しなければならぬものである

▲此國家の一大家庭に於て政治は男性側の主人公である如く宗教は女性側の主人公であるうらして同じ男性である實業や經濟は長男次男の位置にあるものであると同一く彼女性側の文學は即ち御嬢様の位置にあるものである

▲世に宗教無用論を唱へまするものがありすがこれらの輩は家庭に女性を必要とせぬものゝいふことである尙も組織的家庭に於て女性がなくてはならないことを知る程のものならば國家に宗教を必要とせぬなどいふ御歌句をいふものはあるまい

▲既に宗教が女性側の主人公であるといふことを知る上は私は少し歩を進めて此宗教が女性として果して完全な美を發揮して居るか否かといふことを研究しなければならぬ

▲今や女性問題が盛んになると共に宗教問題も盛んであるうらして女性問題の火の手がハイカラ連の式部側から唱へ出されたと同じく又宗教問題の火の手もハイカラ學者の側から唱へ出された、然し宗教問題の骨子はどこにあるのであらういふまでもなくそれは宗教の性能を完全に發揮するにあるのである宗教の性能とは何であるか即ち静である、慰めてある、しとやかである、やさしさである、此性能を完全に發揮すればそれで宗教が國家といふ一大家庭にあつて女性としての

我心の囁き

文科大學 おぼろ生

こは我が古き日記に書きつけられし事どもなり。さすがに匡底に秘め置かんもとてかくは。

○然かすかに朝は朝なりけり。晝ならば此あたり、唯塵と、芥と、塵々たる中を急はしく往來する人馬の響と、罵り呻く修羅の聲もて満たさるゝを、さすがに朝は朝なりけり。脚下を流るゝ水の特に清しと云ふにはあらず、道並の家の別に美しくなれりと云ふにもあらねども、只何とはなく清冷の氣あたりを占めて、身も心も洗はれし心地のするはさすがに朝は朝なりけり。

吾等が罪深く、障多き五尺の形骸が各自悲願の御手に救はれぬとも、敢て光明を發するにもあらず。四百四病の器たる事は少しも變らで、貪慾の心愼志の災、更に其勢を弱むるに非ず。一切の煩惱亦舊の如くなれども、信仰あるものはさすがに信仰あるものなり。風に靡く柳の如く、雪にしだれし青竹の如く、世と共に移りて而も守る所あり。人と争はずして、而も遂に人をして服せしむ。誠に信仰の力は朝の力と共に偉なるかな。(五月二十五日)

○祖先の信せしが故に我も信ずと云ふ信仰は薄きかな。世界の大多數が信する故に我も信ずと云ふ信仰は危き哉。三千年前た五千年の歴史を有せる宗教にして、最も長き時間人心を支配せるの故を以て信ずと云ふは危き哉。

我は私の煩悶より救済せられし内心の實驗を待つて初めて之を私の信仰とよぶ。是れ萬世を通じて動かず、水火も溺らす能はず、富貴も淫する能はず、威武も屈する能はざるものなり。吾煩悶は此信仰によりて醫るを得べく、吾苦痛は此信仰によりて滅するを得し。我が安慰は此所に得られ、我が立脚地は此所に礎す。

○先覺の書を繕きて、其言を味ふは、我靈を開拓し、未だ開けざる心眼を開き、既に開きし心眼に道を教ふるにあり必ずしも古聖と同一信仰を得んか爲めに非ず。(八月十八日)

○求むる所あるものは幸なるかな。彼は煩悶し、懊惱し、憤懣す。一見不幸に近しと雖も、冷然死灰の如く、求むる所なくして、只空々寂々と世を過すもの、無聊なるに何れやや況んや、求むるものは得る所あるに於ておや。

然れども身天地の大と等しく、六合に遍満し、微塵に入り物として美からざるはなく、事として辨せざるはなく、變に應じて悲まず、喜ばず、宇宙を達觀して世と相應す。

此者を以て、彼者に比す。果して如何。嗚呼、吾や浪々幾年、齡はや青壯を過ぎて未だ一事の成すなく、一業の緒だに就くなし、只録々として書窓の中に起臥す。然も時ありてか悲憤自ら遣る所を知らず。時ありてか欣然として并舞する事幼童の如く、怒れば則ち赫然として擠攘し、悲めば則ち潸然として涕泣す。心、境を抑ゆると能は

上なる哉。(八月九日)

○げに秋は悲しきものなり。心に痛みあるもの、惱みあるものは、其傷口を愈々深くむぐらるゝが如し。

見よ、自然の様をあせべき色は漸やくあせ、落つべき木の葉は残りなく落ち、只常盤木のみは益々其緑を増すのみ。見るものとして痛みを覺わざるはなし。

聞け、自然の聲を。候鳥往來頻りにして、鳴禽は最後の挽歌を奏す。暮れゆく秋を悲しみてか。庭前に落つる一片の枯葉、婆娑として鳴る。聲、天地に響くに非ずや。

されど、徒らに嘆くは吾人の取らざる所、空しう悲しむは吾人の欲せざる所なり。人生轉變極まりなし、今年も亦暮れなんとするに、余れ獨り尙天地の間に生を保ちつゝあるを思ひては、茲に尙無限の感謝の、送り出づるを禁する能はざるなり。(九月廿五日)

吾には動かすべからざる實在あり。君主も力かなはず、富貴も誘ひ難し、主觀的には誠に無限の價值を有す。かくて此我をして客觀的にも價值あらしむるものは社會なり。主觀の無限の價值を知りて、社會の其の是れあらしむるを知らざるものは陋なり。己か價值を知らずして、只管社會を尊ぶものは愚なり。極めて幼くは、此等の何れをも知らず。漸やく長じては、社會客觀の價值を認むれども、未だ主觀の何なるやに至らず。既にして一度客觀の其の價值少なさを知るや、疑

ず。境、常に心を制す。意志の力の弱き事を思ひては半夜終に眠をなさず。弱きをも捨て給はざる佛陀大慈の廻向ましまさずんば、又何れの處に於てか適歸するあらんや。(八月一日)

○空中に聲ありて云ふ。

吾は佛陀なり。汝は罪障深きものなり。吾は絶對の善なり。汝は蠅の如く腹黒き邪なるものなり。汝は地獄に墮つべきものなり。吾は極樂の法王なり。汝若し其罪惡を恐れ、地獄を厭ひ、邪なるを嘆かば、只吾にすがれ。吾は眞理なり。力なり、慈悲なり。汝の業障も、煩惱も、吾眞理吾慈悲に逢ひなば、春風の氷を吹くが如からん。我力を信せよ我慈悲を信せよ。信じて疑ふなかれ。然らば汝は限りなき平和と、限りなき歡喜とを得ん。かはかりの罪障迷惱を除かん、吾を怪しと思ふか。智眼盲せる汝が左思ふは理りなり。知らずや、吾には無上の智慧あるを、吾には無上の慈悲あるを。吾は汝の煩惱に苦しめるを見るに忍びず、夙に既に汝の爲めに此法門を開けり。然るに汝は是迄は名利の大山に迷惑して、汝の實相を知らざりき。知りたる今、汝は自ら其余りに大なる罪に泣くと云ふか。然らば吾を信せよ。我力と、慈悲と、惠光とを信せよ。汝は救はるゝを得んと。斯くて、余は浮世の義理や、人情や、勤めや、責任や、少しも苦しきものとは思はずなりき。幸なるは今日の我身の

惑を生じ、遂に主觀の確然不動なるを知る。是れ自覺の時代なり。主觀に無限の價值を許して、未だ客觀の如何を知らざるものは、達觀の士と稱すべからず。兩者の間に有機的關係の存在するを知るものにして、始めて道を談ずべし。

向島五月雨日記

黒頭尊者
垢面居士
白毫如來

ふりみふらずみの五月雨の日を、ひとりものうくあかしくらすも餘りにやるせなければ、いざさらばゆひて向島の景色なりと見ばやと、一人二人さては三人の友ぞうちつれてゆく、都大路の人の往來のはげしさよ、

彼等は何故に車をいうがして走るや、車に乘人、車をひく人、一重八重の世や、花をまつ人、花を惜む人、富貴此處にあり、貧賤此處にあり、

見よ君、面白といふか、吾に却て涙あり、たゞに五月雨のふるのみかは

かくて百花園にいたりぬ
白き花、紅き花、紫の花、あるはあぢさへの雨に頭重げなる、或は葛の葉の風に片々たる、然すかに風情の捨て難なるして、こゝ都近う別乾坤の存するあり

君よ我等はかくて永へに清う澄み得ざるにや
花にことよせて天地自然の情緒のさやけるをさかずや、
雨にことよせて社會人生の活書の寫し出されしを見るや、
唯に花のみにあらず、唯に雨のみにあざざるなり

我等は花をもとめて五月雨の向島を訪れつ、我等は花に捨
られて五月雨の向島を去る、悄然として頭はうなだれ、茫然
として足は進まず、我等は言葉なうして長堤をたどりぬ、あ
はれ人生の事凡て皆かゝるか
されど君、見すや、泛々として波上に浮ぶ都鳥を、いかに
うの悠々として樂しげなるよ

またかの短艇を見すや、如何に其勇ましげなるよ
またかの漁船を見すや、如何に其忙はしげなるよ
吾妻橋を渡る人々はそも幾人なるべき、製紙會社の煙突は
永へに黒煙を吐くも未だ飽かざるにあらずや、觀音の塔、
待乳山の森、やかて朽ち果つるの時もあるべし、されど彼等
は平然たり、墨田川の水は滾々、流れて未だ盡さず

君よ、我等は餘りに人生觀に老ひすや、墨堤や、百花園や
我等の憂苦を増さんとはあらず、我等は寧ろ無心に過ぎ行
かんをこそ、花も愛を表するなれ、水も情を誘ふなれ、我友
よ如何に
三人は心機一轉しぬ
言問の團子は甘かりき

▲太平樂の發刊 日蓮宗書堂として有名なる京都の平樂
寺村上勘兵衛氏は今回大に業務を擴張し宗門有益の新刊書を
續々出す由なるが先づ手始めとして太平樂といへる月刊雜誌
を發行し既に第一號を出したり主張を除く外總るび附にして
男女老若を問はず讀易きもの主筆は小倉道敏君にして主張に
は國家の進運に伴ふ妙法の宣傳を鼓吹せり特に聖門家庭の讀
物あり初號は一萬部を印刷して全國に配布せし由なるがなか
盛んなや方也村上氏は四百年來日蓮各宗の書籍を賣捌
きたる舊帝都の名家なるが今や聖祖門下の一般の傾向が何と
なく活氣を帯び來りたる時同書店が一層の銳氣をふるつて宗
門に貢獻せんとする志は爲法爲國に嘉みすべきことにして
聖門各宗に於ける諸問題の刷新は其機運を早むるならん大平
樂の編輯は記事の配置等なか／＼苦心の跡見ゆ幸に健在なれ

▲總本山妙滿寺管長猥下就職披露式 六月二日本
山出發關西各地方御巡教中の管長猥下并に野口部長能仁事一
棍木日種師等の隨行員の一行は總本山妙滿寺に於て就職披露
式を舉行すべく一先づ去月二十五日午前十時三十分七條驛に
御着あらせられ菊岡亭に少憩の後御出迎僧侶信徒約五十名を
從へて車輪轟々目出度御入山あり 三寶の靈前に於て讀經、
慶讃文の朗讀、野口部長の喜慶文奉讀あり直に御親教の法話
ありて一同大廣間に於て禮酒を賜り各地よりの祝電及岡本圓
正師の祝詞代讀富永益三同勝三氏の祝辭ありて後晝飯の饗應
あり午後五時半散會せり尙猥下及隨行員一行は翌二十六日午
前十時四十分發にて石川福井縣各地方御巡教の爲め出發せら
れたり (京都通信)

本多管長猥下戰時御親教日記 (二)

六月七日廣島市松川町妙詠寺に於て午後一時より講話、右終
て直ちに國聯合ありき
八日は午前八時より十一時まで同寺に於て補助輸卒隊の請に
應じ管長猥下並に野口僧正の講話あり、前日夕景より俄に同
寺本堂前に座席を裝設しテントを張り準備を調へたれば、當
日堂の内外に五百餘名の將卒恭敬圍繞して前後三時間に涉れ
る講話を毫も倦色なく傾聽感服し、殊に講話の前後に隊長一
令の下に一同敬禮せる有様は實に當如敬佛合掌以敬心欲開具
足道の趣を思浮べられいと殊勝に覺ぬ、同日午後は尙ほ同
寺に於て前日同様演説ありき
九日は全市新川場町本照寺にて午後追吊會あり管長猥下が朗
讀せられたる誦誦文を示さむ

敬啓誦誦文一章

本請

本門常住之三寶諸尊來臨影向知見照覽アラセ給へ

病歿者ノ諸靈ヲ吊フ
粵ニ恭シク道場ヲ淨メ寶壇ヲ飾リ虔デ征露皇軍陸海軍戰死

伏而惟ミレバ久遠實成ノ如來ハ化衆生ノ所願ヲ法華ニ顯ハ
シ、一乘醍醐ノ法味ハ濁末世ノ群萌ヲ一念ニ救ヒ給フ、當
體蓮華ノ花ハ三毒ノ池ニ開キテ、四德具足ノ葉ハ人天有爲
ノ園ニ結ブ、法華開顯ノ妙寔ニ言語道斷心行所滅セリ
凡ソ世間出世ノ二門ヲ別チ歸一ヲ教ヘザルハ佛教中ノ方便
ニ屬ス、佛教ノ真意ハ唯是レ一實諦ナリ、所謂人道世善ヲ
開顯シテ無上菩提ニ到ラシム、然リ而シテ人道世善ノ精華
ハ忠孝ノ倫理ニ存ス、克ク國ヲ護リ克ク公ニ殉スルハ是レ
即チ大忠至孝ナルモノカ

今同日露交戰ニ膺リ吾國民忠勇義烈ノ特性ハ遺憾ナク發揮
セラレ、海陸共ニ大捷ヲ博シ、隆々タル帝國ノ威武列國ヲ
震撼セリ是レ實ニ

今上天皇陛下ノ聖德ニ因リ宿昔十善ノ功德ニ酬ユル所ニアラ

ザルナシ、而シテ此ノ戰役ニ參加シ名譽ノ死ヲ遂ゲタル軍
人ハ眞ニ大忠至孝ノ烈士ナリ義士ナリ丈夫ナリ日東帝國ノ
生命ナリ柱石ナリ干城ナリ誰カ是レヲ景慕セザラン上ハ
陛下ノ大御心ヲ安ンジ奉リ下ハ五千萬ノ民衆ヲ護ルモノ赫
々タル芳名ハ千歳青史ニ輝キ焰々タル功烈ハ萬世志士ヲ起
タシム吾帝國ノ基礎爲メニ羣ク吾民族ノ發展爲メニ興リ東
洋ノ平和爲メニ維カリ世界ノ文明爲メニ進マンカ於戲欣ブ
ニ堪ヘタリ其徳ノ大ナルコト蒼海ヨリモ大ナリ於戲仰グニ
堪ヘタリ其功ノ高キコト泰山ヨリモ高シ矣
茲ニ本職戰時巡教ノ期ヲ幸トシ當市本宗ノ僧俗胥議リ追悼
法會ヲ修シ以テ忠魂義魄ヲ吊フ今所持ハ三大秘法ノ妙法、
所修ハ純圓一實ノ甘露味所立ハ輪圓具足ノ大寶塔、所誦ハ
諸經中王ノ寶典、所講ハ對絶不二ノ妙旨ナリ、仍之殉難忠
死ノ諸靈頓ニ無上菩提ノ華ヲ開キ自在無礙ノ空ニ游ハン、
其ノ住處ハ常寂光土常波羅密ニ攝成セラレタル所、我波羅
密ニ安立セラレタル所ナリ、夫レ斯ノ如クンバ忠死ノ諸士
ハ人世無上ノ光榮ト涅槃最上ノ妙果トヲ併セ得タルモノ亦
何ノ悦カ之レニ加ヘン
伏希クハ佛天三寶擁護ヲ垂レ諸士ノ英靈ヲ導キテ寶土ニ入
リ帝國ノ軍人ヲ護リテ健全ヲ保タシメ勝利皇軍ニ歸シテ國
威中外ニ揚リ旭日東天ニ昇リテ西空ヲ照ラシ日本ノ佛法昌
ヘテ閻浮ヲ濟ハンコトヲ茲ニ聖祖ノ三大誓願ヲ誦シテ以テ
偈ニ代フ

誓ヒシ願ヤブルベカラズ

我レ日本ノ柱トナラン我レ日本ノ眼目トラン 我レ

日本ノ大松トナラン等ト誓ヒシ願ヤブルベカラズ

誓ヒシ願ヤブルベカラズ

于時明治三十八年六月九日

管長大僧正 日生 稽首稽首

當市の布教は三日間の豫定なりしも要請に由り特に一日を延ばし十日は午前中に師團及び病院を慰問せられ、午後には本照寺にて説教ありき

今全市の藝師日々新聞の記事を録して當時の状況を詳にせしむ(1)顯本法華宗管長の一行 顯本法華宗管長大僧正本多日生師は總本山部長僧正野口義禪師外數名を隨へ戦時布教並に軍隊慰問の爲昨七日來廣左の日に依り大演説會及び國體會並に戦死者追吊會等を開くよし

七日午後一時より 松川町妙詠寺に於て
八日午後一時より 東寺町本照寺にて
九日午後一時より 東寺町本照寺にて
因に記す同管長は各宗管長中最も英俊にして雄辯の聞ぬある人なり(六月八日の分)

(2)本多管長の一行 顯本法華宗管長大僧正本多日生師の一行は既記の如く去ぬる七日來廣松川町妙詠寺に入り直ちに戦時布教大演説會を開き大橋本照寺住職開會の辞を演べ次に隨行員梶木日種師は興國的宗教を論じ次に隨行長本山部長野口僧正は戦後の經營と云へる演題にて宗教に關し説く所あり最後に本多管長は戦時講話として最も適切に死生の眞理を演べたり翌八日は午前八時より同寺附近に合營せる第○師團第十八補助隊卒隊五百十七名の爲に精神教育の講話をなしたるが野口僧正先づ日の觀念、身讀、國の柱と云ふ三項目の解説をなし時局に關して最も凱切に論述する所あり次に本多大僧正は二回に分ちて講話をなし前には大いに軍人の光榮輸卒の自覺を説き後には死の眞理並に持久の決心を論じたり譬喩適切興味盡くるなきの間に 聖勅の眞意を敷衍し多大の感動を與へたり然れば富氣隊長を始めとして將校下士兵卒等も管長の雄辯と其の思想の豊富なるを嘆稱して措かざりきと尙同日は更に午後二時より妙詠寺に於て一場の演説をなし昨九日午前中は師團豫備病院等を巡訪し午後二時三十分より市内新川場町本照寺に於て戦死者追吊大法會を執行各し戦死者の遺

族は勿論師團長、縣知事、市長、各隊長、諸官衙高等官、新聞記者其他へも案内したれば定めし盛況なりしならん(六月十日の分)

(3)戦死者追吊大法會 既記の如く本市新川場町顯本法華宗本照寺住職大橋日襲師等の發起に係る日露戦役戦死病死者追吊會は一日午後二時三十分より同寺本堂に於て執行せられたり今當日の模様を概記せんに同寺正門には同寺の定紋を染抜たる紫唐縮緬の幔幕及び提燈を吊し本堂の式場には戦死病死者の過去帳並に種々の供物、活花等の設備あり雖て號鐘の鳴り響くや遺族信徒及び來賓等の入場次に本宗管長本多日生大僧正は當日の導師として盛裝せる衆僧を率ゐて入場し着席すると共に導師は更に禮盤に登りて禮拜讀經、衆僧之に和し讀經する所ありたる後導師の吊文朗讀に引續き信徒有志者の過半朗讀あり之を終れば導師は靈牌に向つて戦死病死者の過去帳を一々朗讀せり夫より參拜者の焼香ありたり是にて式全く了り暫時休憩したる後更に本堂にて同寺住職大橋日襲、隨行長本山部長野口僧正兩師の講話あり最後に本多管長の戦時に關する親教ありたるが同五時三十分過一同散會し當日來會の重なる人人は白坂本縣事務官、高知縣屬、愛國婦人會支部役員、新聞記者等無慮數百名にして頗る盛會なりき(六月十一日の分)

十一日は美作國津山町に於て津山日曜講話會の招聘に應じ、午後二時より全町鶴山公園の鶴山館にて講演あり、先づ野口僧正は「修養談」として凡る一時間、猥下には「佛敎の開顯主義」と題して二時間餘講演せられたり、因に云ふ會は全町に於ける教育ある人士が作年來各宗教を研究する目的を組織せしものなり)

十二日は午後同町林田本蓮寺に於て法要あり、全夜上の町弘通所にて追悼會あり、終て婦人會の爲めに講話を開かれ、岡山より一行に加はりたる能仁僧都は「戦の人」野口僧正は「悉

く辭へり」猥下は「信成就の微證」を説かせらる
次下は山陽新報の記事を掲げむ

(1)日曜講話會 既記の如く去る十一日午後一時より津山町鶴山城趾鶴山館に於て日曜講話會を開催したり本會員今井壽氏は開會の辭を陳べ次に野口義禪師は修養てふ題目の下に人間心性の培養を演じ終て顯本法華宗管長本多日生師は佛敎の開顯主義と題し先佛敎の由來功德を論じ延て我日本帝國は宗教の本に存立すること及宗教の刷新發達を謀るは我國體に於て必要なることを辨じたり當日聽衆は約百名に達し中に裁判官あり警官あり學校教員あり學生あり又地方有志あり何れも靜肅に傍聽し閉會を告げしは午後四時過なり因に兩師は因伯に向け發足せしと云ふ(六月十三日の分)

(2)佛敎講演會 去る十二日佛敎婦人會の主唱に依り曩に津山町上の町弘通所に於て顯本法華宗管長本多日生師を聘し佛敎講演會を開きしが今回更に來る十九日全所に於て同婦人會員及有志者の發起にて午後七時より全師を聘し講演會を開催する由(十七日の分)

(3)本多日生師の講話 顯本法華宗管長本多日生師が既記津山町日曜講話會に於ける講演の大意を聞くに左の如し

佛敎は厭世觀を教ふるものと誤解する者多きも佛敎は未來成佛を教ふるのみならず人世の幸福安寧を増進せしむるの教訓なり吾人軍國民は陛下の大御心に奉答せざる可からず一は武威を中外に輝かすことにしては已に今回の日露交戦に於て十分武勇を宣揚し世界を驚倒せしめたり二は文明を以て世界を敬服せしめざる可からず政治經濟學術等總ての方面は今日己に大に發達すれども精神上に於ける宗教道義の觀念頗る幼稚なり日本は聖德太子に由て神儒佛三道を融和して國體を築き上げられたり然るに維新當時佛敎を分離せんとしたるは見孫ある老婦を離縁せんとするが如く頗る無意義のことなりとす日蓮上人は曰く法は躰なり國は影なりと忠孝の精神は即ち

法なり此精神あつて初めて日本の國家存立するものなり此精神は人道なり而して此人道は法華經により開顯せられて初めて教化の方針立ち國家確立すとて勅語及日蓮上人の語を引き對絶兩善の接合不生不滅の覺悟佛陀覺本迹觀等を述べ基督の孤立的の神と佛敎の統一的多神の教義を説て基督敎の非眞理非國家主義を論じて日本に同化するか或は道の爲日本より退去するかの二途を取れと訓戒し戰勝國の宗教として佛敎の開顯主義を採用すべきことを論斷したり(今生)(全前)

十四日は鳥取市法泉寺に於て午後一時より戦時講話あり即ち戦時布教演説 顯本法華宗管長大僧正本多日生師以下隨行員數名は已記の如く昨日來鳥同日午後一時より當市立川町一丁目法泉寺に於て戦時布教演説を試みたるが聽衆者二百餘名は及流石に廣き室内も立錫の餘地だになく午後六時過ぐる頃散會したるが同管長一行は昨朝東伯郡松崎宿へ向け當地を出發したり(六月十六日因伯時報)

十六日午後一時より東伯郡松崎村本立寺に於て追悼法會並に講話あり、又全地東郷の市橋家よりの招請に依り翌十七日修法並に猥下の御講話ありき

十九日には豫記の記く津山町弘通所に於て婦人會の爲めに猥下の説教ありき
二十一日は播州明石町圓乘寺に於て午前國體會午後追悼會並びに講話あり、同夜は全町王西座に於て公會演説あり、強雨にも拘はらず頗る盛會教益甚大なりき

二十二日は午後八時より大阪市南區浪華俱樂部に於て公會演説あり、能仁僧都は戦勝の原由、野口僧正は國寶論、猥下は戦時講話の題にて國民の覺悟は、陛下の大御心に報答するに在ると、即ち武威の發揚と文明の促進、文明の中には人道と佛道との接合、教育家の宗教の眞價を認むべきと、宗教家は道義を融合する考を有すべきと、迷信を斥け、非統一の多神を去り、孤立的の神を取らず、國家的觀念に富める積極的觀

念の宗教を採用し、死に付ては實在觀念の周足せる教訓を示され、具体的實在論を説かる、満堂の聴衆五百有餘名教益甚大なりき

二十三日は午前中第四師團及び豫備病院を慰問せられ午後一時より堺市天神社内聚樂館にて公開演説あり、梶木學統は開會の辭を述べ、能仁僧都は戰勝の原由、野口僧正は三施論を辨し、現下は戰時講話として知恩報恩の事、人間の眞價値、日本の忠孝、國民及び軍人家遺族の覺悟慰安、死に對する説明等二時間餘懇説せらる、會衆三百餘名軍人家遺族多數を占めたり、大西市長は爲國爲市此の講話を贊助して會場を供給し參聽者を勸奨し總ての勞役と費用を擔任されたるは最も感謝する所なり、此の日現下御着堺の折龍神町に於ける日宗の信榮講中が堺驛に奉迎したるは奇特の事なり

二十五日は京都總本山に於て管長就職式を擧げらる其の状況は別報あるべければ略しぬ

二十七日は午後一時より金澤市桃島町本光寺に於て御親教あり、隨行長野口僧正外二名前講を勤む、雨中來詣するもの多數

二十八日は全市給阪町本長寺に於て午後より御親教、前日全樣頗る盛會なりき

二十九日は午前中師團及び豫備病院を慰問せらる、途中公園に俘虜露兵の群を成して來るあり、現下輒ち監督者に告げて彼等に慰安の語を與へらる、曰く奉ずる所の宗教異なれりと雖も、仁慈博愛の主旨同じ、今と予等に邂逅し同情の感に堪へず、須らく身心を保養せよと、曹長四名進み出て脱朝敬意を表せり、午後二時より本長寺に於て追悼會を修せらる、中原中將等來會遺族者三百餘名、終て戰時講話ありき、化益甚大本長寺追悼會に於ける現下の諷誦文を示さん

敬啓諷誦一章

本門常住ノ三寶聖衆來臨影嚮知見照覽アラセ給へ

タリシ戰敗ノ苦心ハ全ク無用ニ歸シテ帝國ノ威武中外ヲ震撼シ國光日ト俱ニ四海ニ輝キテ皇運ノ隆昌天壤ト窮リナカルヘシ荷モ國家ヲ思ヒ皇恩ヲ思フモノ誰カ歡天喜地ノ心ヲ起ササルモノアラシヤ戰敗ノ苦痛ノ甚大ナルヲ理想シタルタケ夫レタケ戰勝ノ効果ノ甚大ナルヲ感スルニ至リ帝國萬歲萬歲ノ聲ハ全國ニ響キ亘レリ豈亦タ快心ノ事ナラストセンヤ

是レ蓋シ我陸海軍人ノ忠勇義烈ナル死ヲ鴻毛ノ輕キニ比シテ勇奮苦闘シ或ハ朝北戰場ノ露ト化シ或ハ海底千尋ノ藻屑ト成リ血ヲ流シ肉ヲ裂キ骨ヲ挫キ高價ヲ拂フテ買ヒ得タルノ賜エアラサルハナシ然リ而シテ是等我陸海軍人カ先ヲ爭フテ忠勇義烈ノ行動ニ出ツル所以ノモノ一ニ上天皇陛下允文允武ノ御 聖德ノ致ス所ニシテ我國民ハ愈々益々陛下皇恩ノ甚大ナルニ感泣セシムハアラズ茲ニ戰時巡教ノ幸機ニ當リ當市本宗寺院等合シテ一大法會ヲ修シ以テ吾陸海軍人ノ戰死病歿殊ニハ當市出身軍人ノ戰死病歿者ノ忠魂ヲ弔フ是レ他ナシ偏ニ諸士ノ英魂ヲシテ單ニ國家名譽ノ戰死トシテ名ヲ竹帛ニ垂ルハニ止マラス其ノ忠魂ノ不滅ノ本體ヲシテ轉迷開悟出離生死ノ大快樂ニ至ランコトヲ祈ルモノ我等カ宗教的情操ヨリ出タル一片哀悼ノ誠意ニ外ナラス仰願クハ三安執ヲ一時ニ斷シ三菩提ヲ一念ニ證センコトヲ經ニ云ク無有生若退若出ト又云ク每自作是念以何令衆生得入無上道速成就佛身ト更ニ願クハ寶祚長久皇軍勝利軍隊健全國運隆昌ナラシコトヲ爰ニ一會ノ大衆ニ代リ捧クル所ノ諷誦一章仍テ斯クノ如シ

于時明治三十八年六月二十九日 管長大僧正 日生 稽首稽首

又全市政教新聞の記事を示さん (1)法華宗管長の軍隊慰問 來澤中の顯本法華宗管長大僧正本

茲ニ衆具ヲ備ヘ淨壇ヲ莊嚴シテ閻浮提第一ノ大本尊ヲ奉安シ三説超過ノ大法ヲ勤修シテ五味爲主ノ甘露ヲ瀧キ謹テ日露開戰已來我陸海軍人ノ戰死病歿者ノ英靈ヲ弔ヒ殊ニハ當市出身軍人ノ戰死病歿者ノ英靈ノ爲メニ成等正覺ヲ祈リ上ル速ニ威應道交アラセ給へ

夫レ日露開戰ノ事タルヤ眞ニ我國建國已來未曾有ノ大事タリ若シ不幸戰敗ノ汚辱ヲ受クルコトアラシカ其ノ結果ヤ實ニ慨クニ堪ヘタルモノアラシ建國已來金甌無闕ヲ以テ誇リタル一大國性ハ頓ニ其ノ美名ヲ奪却セラレ國運發展ノ機運ハ爲メニ一大頓挫ヲ來タシ我カ國權國利ヲ保護スル上ニ於テモ將又東洋ノ平和ヲ永遠ニ維持スル上ニ於テモ東洋ノ文明モ東洋ノ道徳モ東洋ノ宗教モ東洋ノ技術モ是等百般ノ事唯一個戰敗ノ結果トシテ總テ之レヲ失却セラレヘキナリ心ヲ潛メテ假リニ戰敗ノ影響ヲ想ハ、誰カ戰慄愕嘆セサルモノアラシヤ聖祖日蓮語アリ「一切ノ大事ノ中ニ國ノ亡フルハ第一ノ大事ナリ」ト又曰「國亡ヒ家滅ヒナハ何レノ所ニカ身ヲ遁レン汝須ラク一身ノ安堵ヲ思ハ、四表ノ靜謐ヲ祈ルヘキモノカ」ト眞ニ然リ矣今ヤ戰局ハ大ニ進ミ海ニハ早ク敵ノ東洋艦隊ヲ旅順ニ全滅シ東航派遣ノ婆艦隊第二第三ノ全艦隊ヲ玄海洋上ニ邀ヘ撃テ之レヲ動滅シ海上權ニ就テハ復タ何等ノ顧慮スヘキモノナキニ至リ陸ニハ難攻不落ヲ以テ誇リタリ旅順ノ要塞ヲ陷キレ鴨綠江ニ摩天嶺ニ南山ニ得利寺ニ遼陽ニ沙河ニ奉天ニ鐵嶺ニ敵ノ據リテ以テ我軍ヲ沮止シ得ヘシト揚言シタル天嶺ト堅城トハ悉ク我軍ノ占領ニ歸シ陸戰ノ上ニ於テモ前途多ク恐ルヘキモノアルヲ見ス哈爾濱ノ攻撃烏拉湖ノ包圍モ將ニ來ルヘキ戰局ノ發展ニ於テ之レヲ見ルヲ得ヘク斯クテ日露戰役ニ於ケル勝敗ノ問題ハ既ニ已ニ決定シ唯餘ス所ハ平和回復ノ實現ニ於ケル時間ノ問題ニ過キサルニ至リ我國民カ開戰ノ當初ニ於テ憂懼シ

多日生師は昨日午前留守師團司令部を訪問し法華經一卷を寄贈し次に豫備病院に到り傷病兵を慰問したるが途中公園に於て俘虜の散步せるに出遇ひ彼等に對し精神的慰問を加へたりと因に同師は明日當地出發福井市に向ふべしと云ふ

2)法華宗の追弔法會 顯本法華宗の戰死病歿者追弔法會並講話會は已記の如く昨日午後二時より市内給阪本長寺に於て執行せられたり同宗管長大僧正本多日生師自ら導師となり數十名の僧侶と共に最も莊嚴に讀經回向を修し丁寧なる告白文を朗讀せり後客員戰死病歿者遺族一同焼香を爲し茲に追弔法會を終り直に講話に移り本多大僧正壇に上り戰時に於ける國民の覺悟を練陳すると共に家遺族を慰問せり斯くて全く閉會せしは同五時頃にして當日は沖原留守師團長、横山副官、縣知事代理磯野縣屬等を始め戰死病歿者の家族一般參詣者約七八百名に及び頗る盛況なりし

七月一日午前は福井縣坂井郡金津町六日妙隆寺に於て國籍會あり、前田管事來り迎へて法會に列す、午後は追悼會並に講話あり現下並に野口、能仁兩師出演さる、活如來の如く尊敬し參拜するもの夥しかりき

日は福井市相生町妙經寺に於て午前は國籍會、午後一時より追悼會並に講話、野口僧正前講あり、市長愛國婦人會員軍人家族遺族群衆知事は事故の爲め不參の旨態々斷り來れり降雨なりしも頗る盛況、參會者の通報方は總て市に於て斡旋せらる感謝々々

全三日全所善慶寺に於て午後より追悼會並に講話あり前日の如く群衆の爲め講話會場のみは特に妙經寺に移せり

四五兩日は縣下丹生郡志津村山内本行寺に於て

六七兩日は足羽郡社村南居妙正寺に於て

八日は今立郡高村高木信行寺に於て

九日は南條郡今庄村善勝寺に於て

追悼法會、國籍會、講話ある豫定なるが雜誌投稿切期日に切迫するにより福井市までの状況以上の如く通報す(七月三日日隨行員報)

第一一號 大懸賞
一號 二萬二千部發賣!!!

每月一回

大平樂

一 部 郵 稅 共 金 三 錢

太平樂は妙法主義の
闡揚を本領とせる新
時代の要求に生れた
る新思潮誌にして記
者は當代一流の新進
名士、記事精練、誌材
豊富、興味湧くが如
く趣味滴るが如き思
潮誌界の革命的霸王
なり

發行所 京都市東洞
院三條上ル 村上平樂寺

豫告

統一記者古定賢正君著

日蓮上人の研究

第一輯 近刊

▲上製クロース金文字入定價八拾錢▼
▲並製菊版頗美本定價五拾錢▼

右は從來のありふれたる日蓮傳の比にあらざる著者が多年心血を注いで教義的歴史的理想的劇美的立場より上人を研究せられたる結果の發表なり今や日蓮上人の研究は宗教家は言を俟たず學者文人學生の間に多大の興趣を以て企圖されつゝあり本書は上人を眞面目に研究する機運を作らんとして出でたるもの大方の諸賢幸に愛讀を賜へ

殊に本書は五號活字總振假名附にして老幼男女を問はず讀易き書を

東京市京橋區南傳馬町三丁目五番地

發行所 須原屋
取次所 統一團

日宗法衣調製所

●私議從來高島屋飯田吳服店に於て永年商業に従事致居候處
今回御愛顧各位の御勸めに依り左記の處に於て新たに法衣
商相始め候に付何卒同店同様永久御愛顧を垂れ給ひ陸續御
注文の程偏に奉希上候

●弊店は高島屋飯田吳服店の店風に習ひ品物は正確廉直を旨
と致居候得共萬一他店と御競の上高價又は劣等の品物有之
候節は無御斟酌御申越被下度品物御引替又は代金御返却何
れども貴命に随ひ可申候

●地方御注文は御坐ながらにして當店へ御越被下候上御買上
と同じく御満足可被遊様仕度所存にて御注文の節は御着用
被遊候御好も有之候は、可成御記入相願度候其節は御用の
書面に依り協議熟慮の上多數の品の中より適當の品を撰び
十分に注意仕り御送り可申上候尙又別織物染物仕立物は弊
店熟練職工に申付人念の上御送り可申御眺の節は御見積の
上半額程の御入金願度候尙出來の上は代金引替小包郵便に
て御送可申上候

●爲替振宛局は京都二條烏丸郵便局へ御取組被下度候

京都市衣棚通御池上ル 飯田法衣店

御断り

本號は前號に申上けし如く訖度期日に發行する都合でありま
したが印刷所に取込みかありまして數日休業致しましたゆへ
期日に後れました次號からは訖度期日に發行いたし度く存し
ます

編輯局

- 一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
- 一本誌は一冊六錢 十二冊前金六十五錢 郵券代用は一割増但五厘切手を可とす
- 一 論讀申込の節は住所姓名を附書にて認めらるべし
- 一 爲替局は淺草區北松山町として御振込の事
- 一 本圖は別に領收書を發せし但し領收書を要する向は返信料を封入するべし
- 一 爲替振込の節拂渡通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
- 一 廣告料は五號活字廿七字諸每一行金八錢なり

明治卅八年七月十五日印刷發行

發行所	井村 恂也
編輯人	山根 顯道
印刷所	鈴木 暉學
	北澤活版所

東京市淺草區南松山町四十五番地

發行所 統一團

